

Cotopaxi (Ecuador)

公益社団法人 日本山岳会創立120周年国際交流事業
日本・エクアドル外交関係樹立100周年記念

友好合同登山隊2019～2023報告書

～両国の高みを目指して～



Fujisan (Japan)



チンボラソ山頂からの下山

2019 エクアドル



コトバクシ山頂にて



テレフェリコ山頂駅からルク・ピチンチャ山へ



ルク・ピチンチャ山へ順応トレーニング



コトパクシ山頂からの下山



チンボラソ山にて。懸垂下降中

～ 2019 エクアドル ～



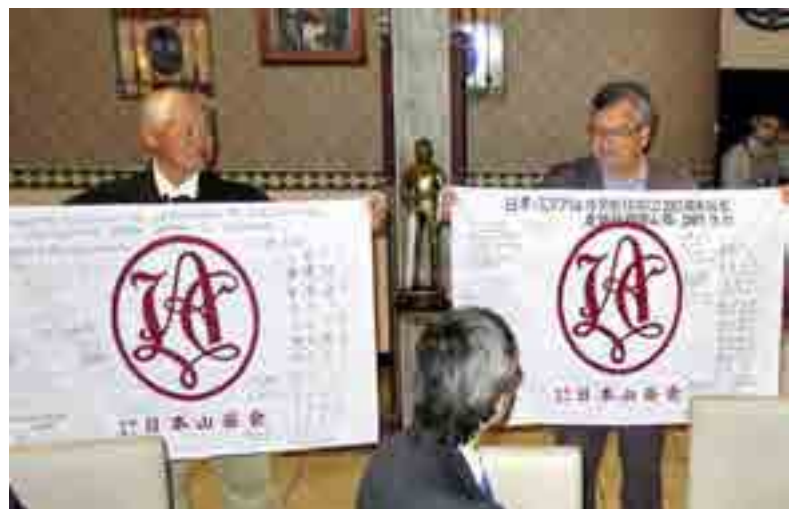
カレル小屋でミーティング中のエクアドルメンバー



カレル小屋からチンボラソ山へ出発



聳え立つクライミングウォール（キト市内）



隊員がサインしたJAC旗を掲げる渡邊リーダーとフラード会長

2023 日本



富士山への祈り



富士山剣ヶ峰にて



熱唱！富山支部懇親会（上）、行衣と金剛杖で（右）





槍ヶ岳山頂にて



槍ヶ岳下降中

～2023 日本～



立山頂上雄山神社にて



立山カルデラ砂防博物館を見学



浴衣でポーズ。西糸屋山荘（上）
東京・浅草の浅草寺へ（左）

公益社団法人 日本山岳会創立 120 周年国際交流事業

日本・エクアドル外交関係樹立 100 周年記念

友好合同登山隊 2019～2023 報告書

～両国の高みを目指して～

はじめに ～エクアドルの皆さんをお迎えして～

日本山岳会会長 橋本しをり

エクアドル山岳連盟の会長であるイレーネ・ポンセさんをはじめ、敬愛するエクアドル山岳連盟の皆様
の日本へのご訪問を心より歓迎いたします。また、在日本エクアドル大使であるセサル・アウグスト・モ
ンターニョ・ウエルタ様のご臨席を賜り、感謝いたします。エクアドルと日本の山岳愛好者として、両国
が100年以上の長い友好の歴史を持つことをとても誇りに思います。

さて、2019年に、外交関係樹立100周年を記念して、渡邊雄二さん、重廣恒夫さん、高野正道さんら
により、国際交流事業として相互訪問による友好合同登山を実施することになり、日本山岳会会員14名
がエクアドルを訪問した際には、エクアドルの美しい山々を共に探索し、その中にはエクアドル最高峰の
チンボラソ峰の登頂を果たした方々もいらっしゃいました。その勇敢な冒険とチンボラソ峰の頂上からの
壮大な景色は、エクアドルと日本の友情の象徴であったろうと思います。

そして翌2020年にエクアドル山岳連盟の方々には日本を訪問していただくことになっておりましたが、
残念なことにコロナ禍の影響で延期を余儀なくされてきました。しかし、本日、ようやく皆様を日本に迎
えることができました。今回の訪問は、国交樹立の105周年を祝い、私たちの関係をさらに深める重要な
一歩であり、ここに皆様をお迎えすることができ、たいへん光栄に存じます。

エクアドル山岳連盟の会員の方々は、日本の美しい山々を熱心に探索し、多くの山々を訪れる予定で、
日本の象徴である富士山、槍ヶ岳、立山を含む多くの山々への登山は、山岳愛好者としての情熱を共有す
る素晴らしい機会となると確信しております。

また、エクアドル山岳連盟の会員の方々は、上高地山岳研究所を訪れ、山岳研究の最前線を体験する予
定です。さらに、山梨支部、信濃支部、富山支部の日本山岳会の会員との交流も行います。これらは、山
岳活動における知識と経験を共有し、友情を深めるための素晴らしい機会となることと思います。

山岳活動は、国境を越えて友情を育む素晴らしい手段であり、私たちの文化を共有し、新たな友情を築
く機会となることを期待しています。この訪問を通じて、私たちは山岳活動における安全性、環境への配
慮、文化交流の重要性について共有し、共同の目標に向かって協力することを楽しみにしています。

エクアドル山岳連盟の皆様、日本の山々と文化をお楽しみいただき、日本でのご滞在が素晴らしい体験
となり、新たな友情と協力の結びつきを生み出すことを切に願っております。どうぞお楽しみください。
最後に、ようこそ、日本へ！心よりの歓迎を申し上げます。

(2023年9月3日 歓迎レセプション挨拶より)

日本山岳会創立 120 周年記念事業について

重廣恒夫

【記念事業委員会】

委員会は 2025 年の創立 120 周年に向けて、2017 年 6 月に発足した。その後、本部委員会、支部などとも調整しながら、2018 年には各委員会の委員長をメンバーとした。

また、それまでに提案された事業について検討を重ね、「グレート・ヒマラヤ・トラバース」「山の天気ライブ授業」「ヒマラヤキャンプ」「エベレスト登頂 50 周年記念フォーラム」「所蔵図書・資料デジタル化」「全国山岳古道調査」などのプロジェクトを立ち上げ、活動を開始した。

【プロジェクト発足】

その後、当時在エクアドル大使館医務官として赴任していた志賀尚子さん（1995 年日本山岳会マカルー東稜初登攀時のドクター）から、日本とエクアドルは 2018 年に「外交関係樹立 100 周年」を迎えるので、国際交流事業の一環として日本とエクアドルの交流登山をしてはどうかという提案が渡邊雄二さんにあった。渡邊さんから相談を受けて、いろいろと紆余曲折はあったが「渡航費そのほか必要経費は自己負担とする」「隊員を 10 人以上集める」の 2 点を条件に「日本・エクアドル外交関係樹立 100 周年記念合同登山隊」のプロジェクトチームが始動した。

【合同登山隊派遣まで】

合同登山隊では、渡航費は別にして、現地ではエクアドル側隊員の家にホームステイし、参加者の負担はないということであったが、隊員の個人負担金は「チンボラソ峰にツアーで参加」した場合の概算額と同等の金額を徴収するようにした。念頭には、翌年エクアドル側隊員を日本に迎えるために懸念される資金確保があった。また、なるべく早く参加者の確定をするために私自身が隊員となり、併せて気心の知れたヒマラヤ仲間の賀集信さんと、グレート・ヒマラヤ・トラバース PJ の吉井修さんにも声をかけて隊員になってもらった。

2019 年 3 月 5 日に国際委員会を主管とし、120 周年記念事業として日本山岳会とエクアドル山岳連盟との相互交流の実施許可の稟議書を提出、受理された。併せて会報『山』4 月号（887）に、2019 年 9 月エクアドル最高峰チンボラソ（6310m）の交流登山、2020 年 9 月富士山（3776m）の交流登山の隊員募集を行った。

【今後について】

日・エ合同登山に参加したメンバーは SNS などを通じての交流が続いており、エクアドルの山登りに興味を持つ人達も増加していると聞く。2025 年の 120 周年記念式典時には、エクアドルからも参加してもらい、雪を冠った富士山を眺めてもらいたいものである。

公益社団法人 日本山岳会創立 120 周年国際交流事業

日本・エクアドル外交関係樹立 100 周年記念

友好合同登山隊 2019～2023 報告書 目次

はじめに ～エクアドルの皆さんをお迎えして～ 日本山岳会会長 橋本しをり 02

日本山岳会創立 120 周年記念事業について 重廣恒夫 03

第 1 部 2019 年登山隊の報告	07
---------------------------	-----------

I 登山隊の概要 渡邊雄二 08

II 概念図 11

III 行動記録 11

1 ルク・ピチンチャ山への順応トレーニング 田島圭悟

2 コトパクシ山登山 瀧澤岳

3 チンボラソ山登山 猪熊隆之

4 トレッキング「ルミニャウイ山（4700m）に登って」 本多幸子

5 「テンプロ マチャイ」へのトレッキング 荒木輝夫

6 赤道と世界遺産の国エクアドル 前田文彦

IV 調査研究 中谷康司 18

V ホームステイ 19

1 45 歳も年の差のある 2 人 重廣恒夫

2 イケメンクライマー ホセ・ルイス君 吉井修

3 寝るのを忘れるほど楽しい時間 藤田礼子

4 ホームパーティーの楽しい思い出 賀集信

5 ヘイコ君の涙 三浦拓朗

6 エクアドルの恋しい味 松尾みどり

VI エクアドル登山事情 ホセ・フラード 22

VII 2020 年エクアドル山岳連盟の訪日予定 24

VIII 会計 25


IX 編集後記 高野正道 26

第2部 2023年登山隊の報告

27

I	登山隊の概要	渡邊雄二	28
II	活動内容	渡邊雄二	30
III	登山記録		34
	1 富士山登山	中谷康司、前田文彦、渡邊雄二	
	2 槍ヶ岳登山	吉井修、渡邊雄二	
	3 立山登山	松尾みどり	
	4 上高地散策	本多幸子	
IV	支部との交流（日本・エクアドル友好合同登山隊との交流会に参加して）		39
	1 山梨支部	古屋寿隆（山梨支部事務局長）	
	2 信濃支部	東英樹（信濃支部長）	
	3 富山支部	鍛冶哲郎（富山支部長）	
	4 山研での懇親会	藤田礼子	
V	同行記		44
	1 ロス・エクアトリアーノスの印象	三浦拓朗	
	2 エクアドルのメンバーと同行した感想	荒木輝夫	
	3 【Vamos!】	田島圭吾	
	4 登山時以外のエクアドル隊	吉井修	
	5 自由日の観光サポート（ファブリシオ夫妻編）	松尾みどり、中谷康司	
	6 前日到着メンバーと成田観光	前田文彦	
	7 成田空港での顛末	本多幸子	
	8 エクアドル友好登山隊・歓送迎会	賀集信	
VI	交流事業を終えて	志賀尚子	52
VII	日本を訪問して		54
	1 日本の皆様へ	イレーネ・ポンセ・サラス	
	2 日出ずる国	ファブリシオ・エステベス	
	3 日本でのクライミング	マリセラ・アリアス	
	4 日本での経験	デニス・カストロ	
	5 夢の国、日本	ルイス・カストロ	
	6 「お腹」も心も満たすおもてなし	ファン・ハビエル・モロチョ・オニャ	

7	私の人生経験	パウロ・オバンド	
8	日本の登山アドベンチャー	アンドレア・トルヒーヨ・ロンキージョ	
VIII	事務局日誌	高野正道	60
	・ 行動概要・日本側メンバー参加一覧		
	・ エクアドルメンバーリスト		
	・ 贈答品リスト		
IX	会計		65
X	編集後記	高野正道	66



第1部

2019年登山隊の報告

I 登山隊の概要

渡邊雄二

1 登山隊の名称

日本・エクアドル外交関係樹立 100 周年記念
友好合同登山隊

2 趣旨

日本とエクアドルは、1918年8月26日に外交関係を樹立し、2018年に外交関係樹立100周年を迎えた。このことは、2016年1月に私がチンボラソ山登山に現地を訪問したときに在エクアドル日本大使館関係者から伺った。そのときに、是非日本とエクアドルの岳人との相互交流事業を行ってはどうかとの提案をいただいたのがこの事業の始まりである。これまで外交関係樹立100周年を盛大に祝うため、経済、文化の各分野でそれぞれ記念事業が実施されてきた。登山の分野では、3年の準備期間を経て、2019年に日本山岳会とエクアドル山岳連盟が友好合同登山の事業を実施することになった。事業内容は、(1) 合同登山、(2) 山岳会員同士の交流会、(3) 両国の山や自然を紹介するDVDの上映・写真展などの開催である。

本報告は、2019年9月に日本山岳会員がエクアドルを訪問し合同登山やトレッキングを行い、会員同士の交流や情報交換を実施したものである。2020年9月7日～18日にはエクアドル山岳連盟の会員が日本を訪れて、同様の交流を行う予定である。

また、本登山隊の参加者14名に対し、富士山測候所を用いた事前調査(8月17日～19日)、および現地調査(エクアドル)を実施し、事前調査の生理学的データと、現地(ベース4800m付近など)でのデータ、現地登山活動でのパフォーマンスの比較を行うことを目的に調査研究を行った。これは高所医学の進歩に貢献するとともに、近年、盛んに企画されている高所観光(登山やトレッキング)を、短期間の準備で安全に実施できるよう

にするための新たな知見を提供できる可能性があり、現在データなどの分析、検討を行っている。

3 期間

2019年9月1日(日) 成田空港発 14時25分(アエロメヒコ航空57便)

9月2日(月)～11日(水) 登山、トレッキング、交流会・情報交換

9月14日(土) 成田空港着 6時20分(アエロメヒコ航空58便)

4 登山隊の構成

リーダー 渡邊雄二(7914)、アドバイザー 重廣恒夫(7931)、前田文彦(8432)、賀集信(8678)、本多幸子(8808)、藤田礼子(9648)、吉井修(12342)、荒木輝夫(14027)、猪熊隆之(14744)、中谷康司(15433)、松尾みどり(16321)、三浦拓朗(16460)、瀧澤岳(1184)、田島圭悟(1184)

以上14名

5 留守本部

留守本部長 高野正道(11621)

日本山岳会担当(国際委員会委員長) 中山茂樹(11319)

6 エクアドル側担当

エクアドル山岳連盟会長(ピチンチャ登山・クライミング協会会長) ホセ・フラード

(協力) 在エクアドル日本国大使館医務官 志賀尚子

7 行動概要

9月1日

高野留守本部長や家族の見送りを受け、成田空港を14時25分(アエロメヒコ航空57便)に出発、メキシコシティ経由でエクアドルの首都キト(標高2800m)に到着(現地時間23時30分)。エクアドル山岳連盟会長のホセ・フラード氏ら山

岳会員、日本国大使館の志賀尚子氏ら大使館職員の出迎えを受け、深夜、バスで市内のホテルに投宿した。

9月2日

18時より首藤日本国大使主催による歓迎レセプションが大使公邸で行われた。エクアドル側からは、プラド観光大臣、外務省アジア太平洋部長、スポーツ庁次官、チンボラソ県知事、エクアドル山岳連盟会長以下会員多数、キト日本人会長他在留邦人の方々が出席され、外交関係樹立100周年の祝賀の下、登山隊を盛大に歓迎していただいた。登山隊からは、参加者各位に日本山岳会関係の資料(百年史、登山隊報告書、Japanese Alpine Newsなど)を提供するとともに、富士山をはじめとする日本の山々の紹介をDVDで上映し、お互いに情報交換、交流を深めた。

また、日本から、アルパイン・フォトビデオクラブの協力の下、日本の山岳写真を15点持参した。これらについては、後日エクアドル山岳連盟が主催する写真展に展示し、日本の山々を紹介することになった。

レセプション終了後、隊員は友好合同登山隊の

主旨により、キト滞在期間中はそれぞれエクアドル山岳連盟会員の自宅にホームステイすることになっているため、ホストファミリーと面会し、それぞれの家庭に向かった。(ホームステイ)

9月3日

ルク・ピチンチャ山(4696m)へ順応トレーニングのための登山をした。ホームステイ先から各自キト市郊外のテレフェリコ乗り場に集合し、ゴンドラで一気に高度4000mまで上がり、往復約7時間の登山活動を行った。この日の行動の様子で高所への順応が期待された。(ホームステイ)

9月4日

終日、休養を兼ねて、赤道記念碑や赤道博物館、キトの旧市街を観光した。赤道博物館では、赤道直下ならではのさまざまな実験ができ、水の渦の巻き方の違いや卵を立てる試みに一喜一憂した。キトの旧市街は世界遺産第1号として登録され、400年前のスペインによる植民地時代の建造物などが大変興味深かった。(ホームステイ)

9月5日

コトパクス山(5897m)登山のため、キトロア湖経由でコトパクスの山小屋(ホセリバス小屋)



歓迎レセプション (在エクアドル日本大使公邸)

に向かった。コトパクシ山はどこから見ても富士山にそっくりで、日本人にとっては大変親しみを感じる山容である。途中、国立公園事務所に寄り、入域許可の手続きを行った。バスを降りてから約1時間徒歩にて標高4810mの山小屋に到着した。さすがにこの歩みは牛歩の如くであった。夕食と仮眠の後、23時30分にコトパクシ山登頂に向けヘッドランプを頼りに星空の下出発した。日本人11名がエクアドルガイドと6パーティーを編成し、氷河帯に入るとロープを結び合った。

9月6日

午前5時45分～7時30分の間に全員が5897mの山頂に登頂した。夜明けとともに山頂からの眺望は素晴らしかった。それぞれのパーティーのコンディションによって、正午までに全員が山小屋まで無事下山し、その後キト市内までバスで戻った。トレッキング隊は、早朝山小屋を出発し、ルミニャウイ山(4700m)に登頂し、山麓の町で登山隊のバスに合流した。(ホームステイ)

9月7日

休養日。ホームステイ先の配慮で各自、現地の自然や文化を体験しながら過ごした。この日は、トウモロコシと馬のお祭りの日で、各地でいろいろな催しが開催され、ホストファミリーと一緒にお祭りに参加した隊員もいた。(ホームステイ)

9月8日

エクアドルの最高峰チンボラソ山(6310m)登山のためにバスで南米大陸ハイウェイを南下、昼食時間も含めると7時間のバスの旅であった。途

中、公園管理事務所で入域許可を得て、登山基地のカレル小屋(4850m)に夕刻到着した。チンボラソ山登山については、コトパクシ山登山後にエクアドル側と協議し、日本隊員の登山は6名、エクアドルガイドは5名とすることにした。理由は、ルートが状況が大変悪くなっていることや夜間の行動が長時間に及ぶため、若手を中心に選抜した。登山隊は深夜22時、月明かりの下、西稜ルートから山頂を目指した。

9月9日

登山隊の1パーティーはガイドのヘッドランプのトラブルでやむなく登山中止と言う残念な結果が生じたが、他のパーティーは日の出前には西峰に登頂、日の出を待って本峰を往復し無事に正午頃山小屋へ下山した。この日も終日絶好の天気に恵まれた。

トレッキング隊はテンプロ・マチャイを周遊、昼頃に山小屋に戻った。その後バスでキト市内に戻り、ホストファミリーの出迎えを受けてホームステイ先に向かった。(ホームステイ)

9月10日

終日休養日。各自、オタバロ族の市場などへの観光ツアーなどを楽しんだ。本部は日本大使館や関係者への挨拶に出向いた。(ホームステイ)

9月11日

夕方、エクアドル山岳連盟主催の送別会が市内のレストランで開催された。首藤日本国大使も参加され、日本大使館職員、ホストファミリー、現地の山岳会員らが集い、盛大な会になった。JAC



エクアドル山岳連盟主催 送別会

旗にお互いの署名をしたり、エクアドル隊員のユニフォームをプレゼントされたりなど、和気あいあいのもと別れを惜しんだ。(ホテル泊)

9月12日

早朝、エクアドル山岳連盟のフラード会長やホームステイの方々、日本大使館の志賀先生らの見送りを受けてバスで空港に向かい、メキシコシティー経由で帰国の途についた。

9月13日

メキシコシティー

9月14日

午前6時、成田空港着(アエロメヒコ航空58便)。中山国際委員長の出迎えを受け、解散した。

II 概念図

【下図参照】

III 行動記録

1 ルク・ピチンチャ山への 順応トレーニング

田島圭悟

ルク・ピチンチャ山はキトの市街地に近く西に位置する山でももちろん市街地から望むこともできる身近な山である。しかし標高は4696mもあり、日本の最高峰富士山の3776mよりもはるかに高い。そんな山で順応のトレーニングを行った。また、トレーニング中に4名の隊員はSpO₂メーターを着用した状態で行った。山へはテレフェリコと呼ばれるゴンドラで約4000mまで登ることができ、日本国内では経験することのない4000mをあっさりと超えてしまう。ゴンドラを降りるとちょっとした展望台があり、キトの市街地が一望できる。ここはデートスポットになっているようで、我々日本人が高山病を心配せねばならないような場所がデートスポットになっているのはとても面白く感じられた。



ゴンドラ終点駅からは緩い尾根上を登っていく。植生を含め目に映る景色は、日本の山とはまったく別のものである。全体的に緑というより茶色が多く乾いている。その茶色の大地と南米の青い空は、日本の青々とした緑とはまた違う趣を感じるものであった。すれ違う登山者にはウール製品のようなポンチョにカウボーイのような帽子を被った人もいて、些細なところに南米らしさを感じた。途中には大きなブランコがあり、4000m 越えでありながら観光地であることを再認識させられた。緩い尾根が終わると岩が剥き出しになった場所を登っていく。実際、緩い場所ばかりではなく、ルク・ピチンチャには登攀できる場所もあるようだ。山頂からはさらに続く山々が見える。日本というのは案外狭いもので、どの山に行っても見知った山が見えるものだが、ルク・ピチンチャ山から見える景色は、どの方角を向いても初めてで新鮮であった。下山の道のりも同じ道を往復するのだが、ひどい砂ぼこりを立てながら下りていく。今遠征を通して言えることだが、エクアドルの山は乾燥していて砂ぼこりがよく立つ。富士山の砂走をもっとひどくしたようなものだ。そして、砂まみれになりながら、ゴンドラに乗り下山。初のエクアドルの山、些細な違いにすら感動したハイキングであった。



ルク・ピチンチャ山頂

2 コトパクシ山登山

瀧澤岳

コトパクシの山小屋(ホセ・リバス小屋 4800m)まではバスでは行けないので駐車場(4600m)から1時間ほど歩く。ここからはコトパクシ山がよく見える。赤土を侵食するように伸びた氷河とその氷河を痛ましげに見せるおびたしいセラック。円錐状をした山頂と威圧感を与える岩肌。日本の山では決して見ることのできない氷河が織りなす初めての本格的な山。小屋に到着後3時間ほどの仮眠をとり、22時に起床して、パンとココアをいただく。5200m 付近の氷河取り付きまではみんなで行くようだ。小屋の中では風が窓を叩くほどの強風であったが、外に出てみると登るには問題ないくらいに収まっていた。

小屋から2時間ほど歩く。つづら折りの斜面をひたすらひたすら登っていくので、若干退屈である。後ろを振り向くと都市の輝きが見えた。ふと上を見上げる。1時間前に出発したパーティーのライトが見える。山頂もまだまだ遠い。前を向くと先頭が止まった。どうやらここからはアイゼンをつけるようだ。5100m 付近だろうか、氷と土混じりの道に変わる。40分ほどまた歩く。今度は完全な氷河になり始めてきた。田島とガイドと自分でタイトロープをして、ざくざくと氷河を登って

いく。完全な踏み跡が、わだちのように永遠に続いているように見える。ここからはあまり記憶がない。周りの暗さと永遠に続くわだち、時々顔をのぞかせるクレバス、それがひたすら続いていた。高度にうまく順応できなく吐き気で足元がふらついてきた。時々ピッケルを足元にさし、全体重をかけて休む。さすがに自

分の様子に気が付いたのか、休憩をとるように指示された。

呼吸を意識して吸うようにすると体調がよくなり、また出発する。40分ほどで先頭の吉井さん、前田さんパーティーに追いつく。そして抜かす。速いペースのままぐいぐいと登っていくと、田島のロープが張るようになる。頭が痛いらしい。ガイドに休憩をくれと英語で頼むが伝わらない、遅くしてくれと言っても伝わらない。なんとか身振り手振りで休憩をとる。田島は高山病にやられて辛そうだ。一方、自分は数分前には考えられないくらい絶好調である。すでに山頂までもう少しのところ、このままでは夜明け前に到着してしまうので、ペースを調整し始めた。中谷さんのパーティー、吉井さんのパーティー、自分たちのパーティーの3パーティーが途中で追いつき合流して



コトパクス山

ゆっくりと進み、数度の休憩をはさみながら夜明けとともにコトパクス山頂に到着した。

美しい雲海と朝焼けに目がくらむ。山頂は意外にも広い。みんなで抱き合って喜び、写真を撮る。田島は辛そうだったが雰囲気にもまれたのか楽しそうだった。何枚も写真を撮り、満足してから下山する。山頂直下ではほかのパーティーと会う。どうやら途中下山した人はいないようだ。下りは厳しいのではと思っていたが、改めて見るとそこまで急ではない。丁寧に下りれば滑ることはないだろう。行きは暗かったのでよく見えなかったが、明るくなると美しい氷河が連なっているのがよくわかる。行きはあんなにも単調と感じていたのに、下山では違う姿を見せつけてくる。霧氷が樹木型に成長して氷像を作り出す初めて見る光景に目が奪われた。そして最も印象に残るのは、やはり山頂付近にある岩壁のヤナサチャであろう。巨大な岩壁とそれに張り付く氷が美しいコントラストを織りなして、登山者を威圧するかのように聳え立っていた。

下山は順調だった。一気に氷河の取り付けまで下りた。長めの休憩を取り、砂まみれの道を下る。富士山の大砂走のような感じだ。1時間もしないでコトパクス山小屋に到着する。小林さんが出迎



コトパクス山頂氷河を登る

えてくれた。時計を見ると8時30分だった。それから3時間ほどで全員が下りてきた。コトパクシ登山組全員が無事に登頂できたのだ。

3 チンボラソ山登山

猪熊隆之

【9月8日(日) 晴れ】9時 キト発～16時 カレル小屋着～22時30分 カレル小屋発

首都キトから南米大陸ハイウェイを南下する。途中、6日に登頂したコトパクシ山を望むことができて嬉しい。トゥングラワ県の県庁アンバトの町で昼食を取り、ここから高度を上げていく。途中、車窓から見る田園風景が美しかった。エクアドルでは傾斜地でも段々畑や棚田にせず、急傾斜地がそのまま畑になっているのに驚く。

標高4000mを超えると緑が消え、砂漠のような砂地になるのはコトパクシ山と同じだ。国立公園の入り口で入山手続きを済ませ、ビクーニャが草を食む様子を見ながらウトウトしかけると、登山口のカレル小屋へ。

カレル小屋は標高約4850mの高所にあるが、コトパクシ登山の後でメンバーは高所順応ができており、皆元気。夕食を取った後、2時間ほど仮眠を取るが、小屋の中は異様に暑くて寝袋に入ると汗ビッショリ。相変わらず、まったく眠れずに出発時間を迎える。日本側の登頂メンバーは、吉井、中谷、松尾、瀧澤、田島、猪熊の6名、エク

アドルガイドは5名。渡邊隊長、重廣アドバイザーやトレッキングメンバーの見送りを受けて22時30分発。天気は快晴。麓の町の夜景と月が美しい。気温もそれほど寒くは感じない。

【9月9日(月) 晴れ、風弱い、山頂気温マイナス10℃(プロトレックによる計測)】

0:20 5300m 付近

1:35 5500m 付近

2:10～2:40 スタカットをした岩場(5600m 付近)

6:10～6:30 西峰(6267m) 登頂

6:45～7:00 主峰(6310m) 登頂

7:15～7:30 西峰

9:00～9:30 5500m 付近

10:45 5300m 付近

11:45～12:00 カレル小屋着

隊列は吉井パーティー、瀧澤パーティー、中谷・松尾パーティー、猪熊パーティー、田島パーティーの順。エクアドルガイドはそれぞれのパーティーに1人ずつ入る。当初はノーマルルートを行く予定だったが、温暖化の進行によりルート状況が非常に悪くなっていることから、尾根上のルートに変更する。その分、大きく迂回することになり、ノーマルルートより1時間ほど余分にかかることになる。ヘッドランプを灯しながら歩を進める。キャンプサイトのある標高5300m付近までは普通の登山道で問題ないが、そこから5500mにか



傾斜地がそのまま畑になっているエクアドルの田園地



登山口のカレル小屋とチンボラソ山

けては大きな岩壁の基部をトラバース気味に登っていく。道幅は狭く、過去に落石による死亡事故も起きているので、慎重かつスピーディーに進む。ここで問題が発生。田島とロープを組んでいたエクアドルガイドのヘッドランプのトラブルのため、田島パーティーはここから下山することになった。

他のパーティーは引き続き前進。トラバースを終えたところでアイゼンを装着する。その後、Ⅲ級程度の脆い岩場を登るところはスタカットで1ピッチ登攀。ここで、ロープや登攀用具の整理などで猪熊パーティーが遅れ、4パーティーが分かれるかたちとなる。岩場を越えてまもなく、氷河の登攀となる。ヒマラヤのようなアイゼンの歯を受けつけないような固い氷ではなく、傾斜も30～40°程度で技術的な困難さはないが、足首が90°程度までしか曲がらない私にとってはもっとも負担がかかる傾斜で、ふくらはぎに疲労がたまる。ペニテンテと呼ばれる氷の尖塔に感動しながら歩を進めると、周囲が明るくなってきた。夜明けを迎える頃、先頭の吉井パーティーは西峰に到着。猪熊パーティーが20分程遅れて最後に到着。主峰に到着する頃には猪熊パーティーも先行パーティーに追いつくが、最後の登りでエクアド

ルガイドがバテてしまう。すでに下山を始めていた瀧澤パーティーを除くメンバーで記念撮影。

下りは、猪熊パーティーのエクアドルガイドはさらに足取りが重くなって遅れるが、日本人パーティーにも疲労が見え、5500m地点で追い付く。行きのルートはここから岩峰の基部まで下降してトラバースしていくが、落石の危険が大きいため、稜線上を進む。途中、懸垂下降を2ピッチ。その後は尾根上を下り、行きのルートに合流。5300m付近で渡邊隊長、重廣アドバイザーが迎えに来てくださり心強かった。ここからは通常の登山道をカレル小屋へ。

4 トレッキング「ルミニャウイ山(4700m)に登って」 本多幸子

前泊したコトパクシの山小屋(ホセ・リバス小屋)を8:00に出発して駐車場まで20分位で下る。前日は小屋まで喘ぎ喘ぎ登ったのに下りは早い。車に乗って登山口に向かう。早朝はコトパクシ山がきれいに見えていたが、上の方は雲に隠れてしまった。早朝に頂上アタックした登山隊は良いタイミングで登ったようだ。

ルミニャウイの登山口の駐車場は湖の畔にあり、



チンボラソ山頂にて

野鳥や植物観察に適した美しいところだった。Dr. 志賀、荒木、私とピチンチャ山岳会の SOSA、MOROCHO の 5 人で登山開始 9:00。ガイド役のピチンチャ山岳会の 2 人から最初は 15 分歩いて体調確認、30 分歩いて休憩、その後は 1 時間で休憩をとりながら、3 つあるピークのうち中央ピークを目指す説明を受ける。ルミニャウイとは岩の顔の意味だそうだ。

歩き始めは、なだらかな草原を進み、展望の開けた稜線に出ると気持ちよく歩けた。頂上近くは天候が良くないかもしれないので、そのときは途中で引き返す約束だったが、崩れる様子もなく、ひたすら一步一步頑張って登る。時々見かける巨大な苔玉の中に可愛らしく咲く小さな花に癒されながら、途中から様子が変わり砂道に、そしていよいよ岩場。ガイドされた通りに岩を登り、13:40 頂上に着く。

頂上は狭かったので高度感があり、怖く感じられた。素晴らしい景色を満喫してすぐ、落石に気をつけながら下山開始。途中の砂道は歩きづらく、砂が舞って視界が効かず、足を取られて何回か尻餅をつきながら下る（痛かった）。

稜線に出た辺りで「コンドル！」という声に見上げると悠々と飛んでいた。なかなか見られないらしい。ラッキーだなあ。眼下には広大な景色に虹がかかり、我々を歓迎してくれているように思えた。

そこからは、強くなってきた風の中、登山口の



ルミニャウイ山頂にて

駐車場まで休憩なく下山。16:30 無事到着。

エクアドルの山の情報が事前に入手困難なので不安があったが、ピチンチャ山岳会の方々のサポートで安全に登れ、贅沢な時間を過ごすことができた。

5 「テンプロ マチャイ」への トレッキング

荒木輝夫

いよいよエクアドルの最高峰「チンボラソ山：6310m」を目指す日が来た……と言いますか、アタック隊は昨夜のうちに皆に見送られ、すでに 22 時からアタックを開始している。我々トレッキング隊——エドガ氏（ガイド）、園田氏（大使館員）、デニー氏（荒木 HS 先ご主人）、フェルナンダ嬢（前田隊員 HS 先の娘さん）、三浦隊員、荒木——の 6 名は朝食を済ませ、カレル小屋（4850m）をあとにした。

コースはチンボラソ山の懐にあるテンプロ マチャイ（4800m）を訪ね、広大な平原をひたすら下る約 4 時間のトレッキングコースである。終始チンボラソ山を左手に望み、その偉大な山頂付近には噴煙のように雪が舞い、余りにも風の強さを彷彿させるので、アタック隊の安否が気にかかるところでもある。緩い下りを進むこと 1 時間、基部である分岐を左に 100m 程ガレ場を直登すると洞窟の暗闇の中から何かが飛んできて頬や頭に当たる。よく見ると蝙蝠であり、その奥には重厚な刀剣が安置されている。なおも 1 時間ほど下った眺めの良いところで休憩をとる。各自行動食で腹ごしらえ、雪煙上がるチンボラソ山をバックに皆で記念撮影。差し入れにいただいたバナナチップの旨いこと、日本と違い砂糖で塗ってなく、バナナそのものの素材が生きていて食べ飽きない。土産にと後日スーパーマーケットで調達したことは言うまでもない。周りを見渡すとサボテン系植物が強風の中、根を張って耐えている。まさに風向きに逆らわずなびいている。草も、岩も皆自然に逆らわず生きてるようだ。そんな中、砂漠の小さな

オアシスを見ると「ビクーニャ、アルパカ」が草を食んでいる。周辺には地元民族の所有する見張り小屋らしき「パオ」があり、そばには見張りと思われる人もいた。青空の下、途中何度も背後のチンボラソ山を仰ぎ見ながら、バスとの待ち合わせの道に出た。お昼前にはアタック隊の待つカレル小屋に戻り、互いの登頂成功を労い、その日のうちにホームステイ先であるキトに戻った。



チンボラソ山を遠望する

6 赤道と世界遺産の国エクアドル

前田文彦

エクアドルはスペイン語の Ecuador (赤道) が通る国。隊休日の9月4日に、全員で赤道とキト市内の世界遺産観光に出かけた。そこを紹介したいと思う。

キトの北22km、サン・アントニオに赤道記念碑と赤道博物館がある。まず赤道博物館を見学した。ここにはGPSで測定した赤道のほか、首狩り族など先住民族に関するいろいろな展示があり、この地での暮らしを学ぶことができる。ここで理科の実験——水槽から流れ出る水の回転方向が赤道の北側と南側で異なることを実演してくれる

(コリオリの力：赤いラインをはさんで、わずか数mで違う！本当?)。見学の終わりに赤道訪問記念のスタンプを押してもらった。

次の赤道記念碑は博物館の南側にあり、18世紀に赤道の位置を求めたフランス隊の200周年記念

として、1936年に10mの高さで作られた。現在は高さ約30m、頂点に地球を模した球形があり、記念碑の前に立って両手を上げると地球を持ち上げ支えているカメラアングルになる。皆で記念写真を撮り合った。記念碑の展望台に上がると、町をはさんだ東側に高い丘のカテキーラ山が見える。この山頂には考古学遺跡(インカ以前と言われている)と赤道のモニュメントがある。そう、真の赤道は、太陽が昇り天頂からまっすぐ沈むところ。カテキーラ山の史跡は次の機会に行ってみたい。

昼食後キトに戻り、世界遺産巡りに入った。教会などの歴史的建造物とともに旧市街の町並みが1978年に世界遺産に登録されている。ヴォト国立大聖堂(見学お勧め：ステンドグラスの装飾は素晴らしい。塔に登るとキト市街を一望することができる)、独立広場と大統領府、〜ヘス教会(建物内部が金で装飾)、聖フランシスコ教会など主に16~17世紀に建てられた建造物を見て回った。朝9時に出発、帰路についたのは17時をまわり、充実した1日となっていた。



赤道記念碑

IV 調査研究

中谷康司

本登山隊では調査研究として、隊員 14 名のうち、実験の趣旨に賛同した隊員に対し、富士山測候所を用いた測定実験【事前調査／2019年8月17日～19日】と現地エクアドルでの測定実験【現地調査／2019年9月1日～14日】を実施した。これらの測定で得られた活動記録・生理学的データ（事前調査・現地調査）と、現地登山活動中のパフォーマンスなどについては、現在学術的な公表に向けて解析が実施されている。

富士山などの自然環境を利用したトレーニングにより、4000m 級以上の高山に向かう前に高所環境への順応を獲得する試みが行われ、トレーニング前後でのいくつかの生理的指標の変化によって順応の効果が示されている（※1）。しかしながら、その詳細は不明な点も多く、現地でのパフォーマンスとの関係も明らかにされていない。そこで、本研究では上記のような測定を実施し、比較検討することとした。特に睡眠時の体内酸素環境は睡眠の質に影響し、登山活動のパフォーマンスに大きく影響するものと考えられることから、睡眠中

の血中酸素濃度をリアルタイムで継続記録し、睡眠中の酸素動態の詳細を把握した。また、高所滞在中、活動前後の血中酸素濃度は体調管理と合わせて頻繁に測定されてきているが、酸素の摂取状況はエネルギー代謝に大きく影響することから、エネルギー代謝全体に目を向けて現象を理解する必要がある。そこで今回の研究では血中酸素濃度に加え、代謝関連物質であるグルコースレベル（血糖値・24時間測定）、乳酸値（ポイント測定）、ケトン体レベル（ポイント測定）を測定し、高所滞在中のエネルギー代謝の全体把握に努めた。

今回の登山隊では、登山班、トレッキング班に分かれたものの、メンバーの多くが同一スケジュール、同一環境にあったため、貴重なデータを一度に収集することができた。また、エクアドルでの測定は、高所であるにもかかわらず、山小屋（4800m）、交通（車、ゴンドラリフト）など、安全な測定場所ならびに機器の運搬ができる環境が揃っていたことで初めて可能となった。実際には、スケジュールの進捗など、さまざまな理由で予定していたデータのすべてを測定することはできなかったが、多くのデータを収集することができた。本研究は、研究時間を確保した登山隊運営



測定風景（富士山測候所）



測定風景



エクアドルメンバーへ説明する筆者（中央）

並びに隊員諸氏の献身的な協力、加えてエクアドル側ホストの研究に対する興味と理解があつて初めて実施できたもので、友好登山の大きな成果と言える。

本研究は、高所医学の進歩に貢献するとともに、近年、盛んに企画されている高所観光（高所へのガイド登山を含む）などを、短期間の準備で安全に実施できるようにするための新たな知見を提供できる可能性がある。また、限られたエネルギー補給の中で実施されるエクスペディションチャレンジにおけるエネルギー動態を明らかにすることにもつながると考えられる。

※1 日本登山医学会編『高山病と関連疾患の診療ガイドライン』「第I章 急性高山病」中外医学社,pp.1-12,2017

V ホームステイ

1 45歳も年の差のある2人

重廣恒夫

今回の合同登山がいつもの海外登山と違うのは、期間中エクアドル隊員の家にホームステイすることにあつた。エクアドル入国後、在日本大使館の計らいで歓迎レセプションが大使公邸で盛大に行われた。宴が進む中で、今夜から訪問するステイ先の隊員を探した。参加者最高齢に見合った年齢と考えていたが、呼びかけに応じて目の前に立ったのは息子よりも10歳以上も若いパブロ(26歳)であつた。その夜から45歳も年の差のある2人の生活が始まつた。

外交官の息子と言う彼は礼儀正しく、ENSA(フランス国立スキー登山学校)の認定ガイドで、エクアドルを代表する若手ガイドであつた。コトパクシやチンボラソの合同登山の過程で、その実力と指導力を垣間見ることができたのは大きな収穫であつたし、朝・夕の彼の手作りのシンプルな料理や、お母さんの作ってくれた山羊の煮込み料理は忘れることのないエクアドルの味である。



パブロ氏と筆者

2 イケメンクライマー ホセ・ルイス君

吉井修

私はピチンチャ山岳会の屋外の巨大なクライミングウォールからほど近いホセ・ルイス君の独り暮らしアパートにホームステイした。彼はまだ24歳の山岳ガイドである。子供の頃からフリークライミングに親しんできたという。すでに南米の難しいルートもいくつか登った優秀なイケメンクライマーだ。

クライマーの彼の食生活は、朝食はグラノーラにヨーグルト、バナナ。昼食や夕食はパスタかプレートひと皿という感じで、シンプルで質素だ。お酒は飲めるけどほとんど飲まない。これぞアスリートの生活。日本での自身の飽食を反省するばかり。

彼はチンボラソアタックに関する私の相談にそれはそれは熱心になってくれたが、時々、深夜、私を一人残して、ガールフレンドのところに遊びにも行った。そのガールフレンドがどうも一人ではないので、ある日、ウォール下のカフェで同じガイドのパブロやその恋人たちと歓談した際、「ルイスの彼女はよくわからない」とからかうと、それは大ウケにウケて、ルイスは「まいったあ」という顔をしながら「自分は恋に落ちやすい」と応じて大騒ぎ。どこの国でも若者は山あり、恋あり、楽しく素晴らしい。彼とザイルを組んで登れたことをとてもうれしく思う。



筆者とホセ・ルイス氏 (チンボラソ山頂)

3 寝るのを忘れるほど楽しい時間

藤田礼子

本多幸子さん、藤田の2名はピチンチャ山岳会会長ホセ・フラードさん宅でお世話になることになり、大使公邸レセプション終了後にホセさんの車でご自宅に伺った。2人を待っていたのは、清潔で快適なベッドルーム、長旅とパーティーで疲れた胃に優しい夫人のマルガリータさん手作りのスープ。翌朝からは、度々早立ちする我々のために美味しいコーヒー、フルーツ付きの朝食が用意された。また、山に出かける際には、行動食とミネラルウォーターまで準備されていた。

初めから自然に受け入れて下さり、常に細やかな気配りに触れ、我々を歓迎して下さっている気持ちが伝わってきて、初めてのホームステイに抱いていた不安な気持ちがいつしかなくなった。美味しい夕食をいただきながら、4人での会話は寝るのを忘れるほど楽しい時間であった。

エクアドルでのホームステイの経験は、人をもてなすとは何かを学べる貴重な機会となり、大変有意義な旅となった。



ホセ・フラードご夫妻・本多氏と筆者 (中央右)

4 ホームパーティーの楽しい思い出

賀集信

南米は行ったことがなく、期待半分、不安半分といったところで、人見知りする性格上、初めてのホームステイにまず緊張した。



リカルド氏と筆者

ホストファミリーのリカルド君（26歳）宅は、現在ご両親と兄さんとの4人暮らし。キト中心部から10km近くもあろう丘陵部にあり、嚴重に鍵が掛かったゲートを車で入ると4~5軒の家があって、その一番奥が彼の家だった。夜に初めて伺ったとき、世界遺産第1号と言われるキト旧市街から延々と続く夜景に圧倒された。

リカルドは話好きで優しい性格で、ご両親より大分年輩となる客人に対しても細かいところまで心配りをしてくれた。ガイドになりたい希望もあったようだが、来年は医療技術の学校に進む予定だとか。ご両親はまったく英語を話さないの、日本から持って行ったポケトーク（音声翻訳機）が大活躍してくれた。誤訳も多いがそれを使うと自然と笑顔がはじけ、互いが一生懸命となる。コトパクシ登頂翌日の休養日には、近くに住むお姉さん夫妻も来られてホームパーティーを催してくれた。ワインの酔いも手伝って、過去の登山の話や、互いのことをいろいろ話し合ったのが楽しい思い出となっている。

5 ヘイコ君の涙

三浦拓朗

出発前、ホームステイはむしろ登山より心配材料だった。英会話もおぼつかないのにスペイン語

だなんて……。1家族に1人と直前に聞いたときは、肝を冷やした。

ステイ先は首都キトからも近いサンゴルキの閑静な住宅地。アウトドア好き4人家族で、お子さん2人ともアジア文化に興味津々。リビングの「ピカチュウ」の絵は長男ヘイコ君（8歳）の力作である。

地球の裏側からの客に、本当に温かく接してくれた。私を気遣ってか、ピラフなどの米料理や焼き魚、登山前にはたくさんの行動食。帰宅後はヘイコ君の遊び相手。日本人に会うのは初めてらしい。言葉の壁はスマホアプリに助けられた。

ホストのハビエル氏の細やかな気配りも忘れられない。こちらからお願いするよりも早く、先回りして下さる。報告書用に私が作成した現地の地図も、地形図が欲しいという珍妙な要望を快諾してくれた氏あつての賜物である。当初の不安は完全に払拭されていた。

帰国前日、集合場所のホテルまでの車中は全員でお見送りしてくれた。ヘイコ君は隣で目に涙をいっぱいためている。言葉は通じずとも「別れたくない」と言っているのはわかった。本当にありがとうね。また会おうよ、な。

終わってみれば、ホストに恵まれたとしか言いようがない。この場を借り、記して感謝申し上げます。



ヘイコ君と筆者

6 エクアドルの恋しい味

松尾みどり

エクアドル空港の到着ゲートを出ると、エクアドル山岳連盟の方々が迎えてくれた。夜中にもかかわらず、私のホストファミリーの姿もそこにあった。背が高くガッシリとしたファブリシオ、私と年齢の近い奥さんのマリ、2人の愛娘スマック。

ファブリシオは親日家で、武道を嗜み、食事はオーダーして作ったという座椅子とローテーブルで食べる。料理上手のマリは毎朝仕事に行く前に美味しい朝食を作ってくれた。彼女に教わった青いバナナを使ったエクアドル料理は、日本の黄色いバナナでは成功した試しがない、現地の恋しい味だ。

休養日には2人の実家にもお邪魔し、エクアドルの歴史や古代文明について教わった。元大学教授のファブリシオのお父様によると、日本人とエクアドル人の祖先は一緒らしい。

親戚一同温かく歓迎してくれ、朝早くから夜遅くまで、食事や送迎など我々が不自由しないよう気を配ってくれた彼らには本当に感謝しかない。帰国後も連絡を取り合っているが、このご縁がずっと続くことを祈っている。



バナナ料理を作るマリさん

VI エクアドル登山事情

ホセ・フラード（エクアドル山岳連盟会長、
ピチンチャ登山・クライミング協会会長）

「ピチンチャ登山・クライミング協会(AEAP)」

ピチンチャ登山・クライミング協会は、53年前の1966年2月17日、ピチンチャ県スポーツ協会とエクアドル山岳連盟の下部組織として設立された。



ホセ・フラード氏

当協会は、社会的、公共的、非営利的な法人で、宗教的、政治的活動とは無関係であり、ピチンチャ県およびエクアドルの登山およびクライミングの発展促進と成績向上を目的としている。スポーツ省によって専門スポーツ養成クラブとして承認されており、現在は以下の組織が所属している——サン・ガブリエル学校山岳会、エクアドル中央大学山岳会、エクアドル・カトリカ大学山岳会、ポリテクニコ山岳会、エル・サダイ青年団、クラブ・ピチンチャ、新地平線トレッキング隊、インティ・ニャン。協会の会員は約500名。

1974年、登山者の安全性や技術的な知識を憂慮して、高所登山県立学校が創設され、そこで低山、中山、高山の登山指導者を養成した。山に行く前の登攀、懸垂下降、安全確保技術の必要性から、ビセンティーナにクライミングウォールが建設され、1979年7月28日に除幕式が行われた。

現在、当協会はスポーツクライミングと山岳登山と、2つのスポーツを代表している。近年、スポーツクライミングでは、選手が国内外のコンペティションでめざましい成績をあげ、ピチンチャスポーツ界でスポットライトを浴びている。山岳登山の分野では、国内外で遠征を行ってきた。

当協会は、ドイツと日本と、2つの山岳会と交流登山事業を行っている。

1990年以來、ドイツ山岳会と協定を取り交わし、ピチンチャ登山・クライミング協会の多くの登山家がドイツやヨーロッパを訪れ、またドイツからの登山家を受け入れ、文化、社会、観光面で二国間交流をしてきた。ドイツとは、これまで15回の交換登山を行い、各回平均12人の登山家が参加してきた。2019年8月には、11人のエクアドルのアスリートがドイツを訪問。さらに10年間の新たな契約を結んだ。

当協会は約2年前から日本大使館を通じて日本山岳会と交流登山のための話し合いを持ち、2019年9月に実現した。14名の日本人登山家を14名のエクアドル人家庭で受け入れた。そして、エクアドルで最も代表的な山々、ルク・ピチンチャ、キロトア、ルミニャウイ、コトパクシ、チンボラソに登り、エクアドルの登山家たちと観光名所を訪れ、家庭的な温かさを共有した。

また、年々、エクアドル国内や国外（ペルー、

コロンビア、ベネズエラ、ボリビア、チリ、アルゼンチン、メキシコ、アルプス、アジア、そして世界中)で新たなルートを開拓し、登頂している。

2000年にスポーツクライミング競技のブームが始まった。2002年4月、キト市にクライミングウォールが創設され、常時練習が可能となり、国内外のコンペに当協会から多くのアスリートが派遣されるようになった。近年、この分野は特に活躍がめざましい。当協会はスポーツクライミングで成績をあげており、選手が国内大会、国際大会に出場し、メダルを獲得したり、入賞したりして、ピチンチャのスポーツ界では重要な存在となっている。登山界においても、ピチンチャ県のクラブは国内登山と国際的な遠征活動により、国の代表的な存在となっている。

これらはすべて、経験と献身をもってアスリートたちを養成し、登頂成功や勝敗にかかわらず真摯に競技に参加するよう導いてきた指導者、技術者らの選抜グループのおかげで成就したものである。また同時に、異なるクラブの指導者らが、組



エクアドルメンバー（歓迎レセプション）

織や国の名を高めようと常に細心の試みを行ってきたおかげである。

「エクアドル山岳ガイド協会 (ASEQUIM)」

エクアドル山岳ガイド協会は、エクアドルの山岳ガイドを代表する組織であり、わが国で最高レベルの研修が行われている。現時点で、協会には160人のツーリズムスペシャリストがおり、その中にはUIAGM国際ガイド認定の取得者、本協会の国内ガイド認定の取得者、登山ガイド養成学校での研修生がいる。

エクアドル山岳ガイド協会は、国内の山岳ガイドがその資格を合法化する同業組合として、エクアドルアンデスでの冒険旅行の需要に安全かつ効率的に応えるため、また同時に、山岳救助に専門的に対応するため、1990年に設立された。

(登山家と山岳ガイドとは区別しておく必要がある。登山家は、好きだから、常に新しいルートを求めて、登山によって収入を得ることなく山を登るアスリートである。山岳ガイドは、ただ山に登りたい、アスリートであることを必要としない人々をガイドして山に登り、またそれによって収入を得るのである)

Ⅶ 2020年エクアドル山岳連盟の訪日予定

□メンバー

エクアドル参加人数は14~16名の予定

□日程予定

9月7日 東京着。歓迎会。東京にてホテル泊 (9月5日 キト発)

9月8日 東京→富士山麓のホテル泊

9月9日 富士登山。前日と同じホテル泊

9月10日 上高地 (長野) へ移動。JAC 上高地山岳研究所泊

9月11日 槍沢 or 瀬沢にて山小屋泊

9月12日 槍ヶ岳 or 穂高岳登頂・下山。JAC 上高地山岳研究所泊

9月13日 上高地→立山山麓のホテル泊

9月14日 室堂経由→立山登山→室堂の山小屋泊

9月15日 大町ルート経由→東京へ移動。東京にてホテル泊

9月16日 自由日 東京都内観光。同泊

9月17日 自由日 東京都内観光。送別パーティー。同泊

9月18日 東京発。エクアドルへ

Ⅷ 会計

2019年登山隊の会計収支を以下にまとめた。

収入			
	項 目	金 額	備 考
隊員負担金	エクアドル隊受入個人負担金	2,800,000	20万円×14名
	※渡航費等の個人負担については欄外参照		
利息	普通預金利息	73	
	合計	2,800,073	
支出			
	項 目	金 額	備 考
宿泊費	キト ホテル代金	225,024	
観光代金	キト 9/4観光	106,704	
飲食費	飲料（隊員用）	2,755	\$25.34
交通費	タクシー 6台（ホテル→大使公邸）	4,241	\$39.00
交通費	タクシー 4台（ホテル→送別会場）	1,957	\$18.00
交通費	バス・タクシー代（送別会帰路）	1,740	\$16.00
渉外費	ワイン24本（現地土産、キト空港）	52,848	\$486.00
渉外費	チップ（赤道ツアーガイド、ドライバー）	1,631	\$15.00
渉外費	登山隊公用土産代	17,514	\$161.06
雑費	カート利用料（キト空港）	217	\$2.00
写真代金	JACアルパインフォトクラブ	29,052	
写真代金	三浦氏（隊員）	6,048	
報告書	『山』（日本山岳会）	35,750	
振込手数料		1,088	
両替為替損		97	
	合計	486,666	
	差引収支	2,313,407	2023年予算に繰越
※上記のほか、(1)隊員の個人負担、(2)現地での費用負担は下記のとおりである。			
(1)隊員の個人負担	渡航に関する費用(航空券191,110円)、海外旅行保険(日山協山岳共済8,910円、東京海上旅行傷害9,790円)、健康診断等(20,000円)、富士山測候所利用(30,000円)など、合計259,810円。		
(2)現地での費用負担	エクアドル国内での滞在費用は、友好合同登山の趣旨により、原則ホームステイ対応でしたので、登山費用も含めてすべてエクアドル山岳連盟が負担した。		


IX 編集後記

高野正道

2016年2月キト、在エクアドル日本大使館医務官志賀氏がエクアドル滞在中の渡邊リーダーへ相談したことから計画はスタートしました。そして、1万5000km、太平洋を挟んでの息の合った二人三脚のような3年を超える両氏の尽力と両国関係者のご支援により実現しました。本隊は、20歳から71歳までの各隊員が、それぞれ別の家庭にホームステイし親交を深めながら、エクアドル側隊員と登山をするという極めてユニークな登山隊となりました。まさに、日本とエクアドルの岳人の「友好」の架け橋となったと言えます。コトパクシ山、チンボラソ山に登頂し、エクアドルの皆さんのホスピタリティにより登山隊は成功しましたが、これはまだ五合目であり、2020年9月エクアドル一行を日本に迎えての「友好」登山まで続きます。エクアドル側のホスピタリティに負けない日本の「おもてなし」でお迎えします。日本山岳会の皆様のご理解とご支援をお願い申し上げます。



INTERCAMBIO
ECUADOR—JAPAN
COTOPAXI FUJIYAMA 2019—2020



第2部

2023年登山隊の報告

I 登山隊の概要

渡邊雄二

1 登山隊の名称

日本・エクアドル友好合同登山隊 2023

2 実施日程

令和5年(2023年)9月3日～9月14日

3 実施場所

富士山、上高地、槍ヶ岳、立山、他

4 事業実施概要

日本とエクアドルは2023年に外交関係105周年を迎え、2025年には日本山岳会は創立120周年を迎える。この良き時期に国際交流事業として相互訪問による友好合同登山を実施した。

2019年9月に日本山岳会会員14名がエクアドルを訪問し、エクアドル山岳連盟の会員と合同登山やトレッキングを行い、相互に交流や情報交換を実施した。本事業は、2020年に実施予定であったがコロナ禍の影響で2023年に延期を余儀なくされ、この度9月にエクアドル山岳連盟13名が日本を訪れ、富士山などの合同登山と各地での関係支部との交流を行った。

5 エクアドル山岳連盟会員

メンバー13名(男9名、女4名)

リーダー エクアドル山岳連盟会長(ピチンチャ山岳会長) イレーネ・ポンセ

協力隊員 元在エクアドル(現ネパール) 日本国大使館医務官 志賀尚子

6 スタッフ

プロジェクトリーダー 渡邊雄二(会員番号7914)

事務局 高野正道(11621)

日本隊員14名、山梨支部3名、信濃支部2名、富山支部6名、その他協力会員

7 日程概要

9月3日

午前7時、成田空港にエクアドル隊員を迎えた。浅草など都内観光後に国立オリンピック記念青少年総合センターへ入所。

オリエンテーションの後、歓迎レセプション、オリンピック青少年センターに宿泊。

9月4日

東京→富士山世界遺産センター見学→山梨支部との交流会を実施→富士吉田市立青少年センターに宿泊。

9月5日

富士登山(スバルラインから吉田口)、天候に恵まれて13名全員登頂した。前泊と同じ。

9月6日

富士吉田→松本城見学→上高地「西糸屋山荘」泊、信濃支部との交流会を実施した。

9月7日

槍ヶ岳登山。天候に恵まれて10名が登頂し、槍ヶ岳山荘に泊。他3名は上高地散策。

9月8日

槍ヶ岳山荘から上高地へ下山し、上高地山岳研究所泊。

9月9日

上高地→高山観光→立山カルデラ砂防博物館見学→国立登山研修所泊、富山支部との交流会を実施した。

9月10日

立山登山。天候に恵まれて、3コースに分かれて立山登山を実施した。国立登山研修所泊。

9月11日

富山→東京へ移動。国立オリンピック記念青少年総合センター泊。日本スタッフとの意見交換会。

9月12日

自由日。東京都内観光(はとバスツアーやショッピングなど)。同泊。

9月13日

自由日。東京都内観光(ショッピングなど)、送

別レセプション。同泊。

9月14日

オリンピック青少年センター→成田空港へ送る。離日。

8 準備経過について

2019年9月の訪問時に、2020年の東京オリンピック終了後の9月7日からエクアドル隊員を日本に迎え、富士山登山などを行いながら友好事業を行うことが決まった。

帰国後に早速受け入れ準備を進め、関係者の協力を得ながら具体的な準備（登山日程、宿泊場所や貸切バスの手配など）を滞りなく行った。ビザのインビテーションの時期になったころ、コロナ感染が日本国内に広がり、結局東京オリンピックが延期になる事態にも発展し、この交流事業も延期せざるを得なくなった。コロナ禍は先の見えない状況が続き、海外渡航の禁止がしばらく続いた。この間にもエクアドルとは情報共有を続け、コロナ禍が落ち着いたら交流事業を再開することで話し合いを続けた。この間に、エクアドル隊員が2020年に来日するために購入したエアーチケットの有効期限が切れてしまうというトラブルも発生し、エクアドル側からの要請に従って、日本山岳会として航空会社に便宜供与の働きかけを行った。結局、エアーチケットの有効期限が延長されることはなかった。このことが、2019年に一緒に登山したメンバーの一部が来日できなくなってしまったことにつながった。

2022年10月11日以降、外国人の新規入国制限が解除となり、やっと交流事業が再開できる環境が整った。エクアドル側の第一希望は、富士山登山なので、実施時期を2023年8月29日から9月9日の12日間と定め、この日程に沿って再び宿泊の予約などを整えた。受け入れ態勢を整え、ビザのインビテーションを発送したころ、エアーチケットの予約問題で参加者が変更になり、エクアドル側の責任者であったフラード会長も個人的

な都合で会長職を退任し、新会長にイレーネ・ボンセ氏が就任して来日することになった。エクアドル側からの参加者は13名、その内5名は新メンバーとなった。ところが、2023年6月になってからエアーチケットや参加者の問題で急遽来日が9月3日と変更になり、これまでの宿泊や貸切バスの予約を再び変更せざるを得なくなり、事務局は大変な事務作業を強いられた。これらの諸問題をどうにか解決し、やっと迎える準備が整った。この間のトラブルには、ネパール大使館勤務の志賀先生が、在エクアドル日本大使館関係者と連絡を取っていただき、難問解決に尽力いただいた。

II 活動内容

渡邊雄二

9月3日

成田空港集合早朝7時という案内でエクアドル隊員を迎えた。13名全員が同じフライトではなく、各自の都合で来日した。ラテンアメリカの気質で明るく楽天的であるのは結構だが、結局2時間遅れで全員が集合できた。

貸切バスで都内観光に案内。外国人観光客で大賑わいの雷門や浅草寺を観光、いきなり日本の観光事情に直面した。集合が2時間遅れになったため、皇居や国会議事堂などは車窓からの観光になった。午後、国立オリンピック記念青少年総合センター（以下オリセン）に入り、日本側スタッフと久しぶりの対面、その後日程説明やユニフォームのプレゼントなど行った。

午後6時から、歓迎レセプションをオリセンのレセプションホールで開催した。橋本会長、プロジェクトリーダー（以下PL）渡邊、エクアドルリーダーのイレーネ・ポンセ会長、在日エクアドル大使セサル・モンターニョ・ウエルタ氏の挨拶に続き、神崎忠男氏の乾杯で開宴、2019年のエクアドル訪問時の登山活動の映像などを鑑賞しながらの賑やかな会になった。120周年記念事業委員会の重廣委員長が閉会の挨拶をして、明日からの活動の充実と安全を祈った。出席者は40名。

9月4日

貸切バスで富士山麓の富士吉田市に移動した。途中、山中湖畔で昼食を取り、富士山世界遺産センターを見学した。残念ながら雲で富士山は遠望できなかったが、明日の富士山登山に関しての事前学習に大変役立った。その後早めに富士吉田市立青少年センター「赤い屋根」に投宿した。富士山登山のスタッフも集合し、夕食前には、宿舎の近くの食堂で、山梨支部事務局長の古屋氏ら3名を交えて交流会を実施した。日本のどこにでもある畳の座敷に車座になり、甲州ワインの差し入れ

で大いに盛り上がった。明日の富士山登山を控えて、21時には就寝した。

9月5日

起床3時、4時にバスでスバルライン5合目に向けて出発した。5合目登山口の天気は、昨日の曇りがちの天気とは打って変わって素晴らしい星空と雲海に恵まれた。富士山保全協力金を支払い、やっと周りが明るくなりつつある5時20分に富士山頂に向けて出発した。

隊の編成は、スタッフ9名、エクアドル隊員13名の総勢22名を体力レベルで3班編成にしてスムーズな行動を心がけた。さすがにお盆の時期とは違って、行列登山ということもなかったが、外国人登山者が多いのには変わりなかった。河口湖や山中湖を眼下に眺め、山頂がいつも遠望できる素晴らしい天気にも恵まれ、エクアドル隊員を歓迎するに相応しい登山になった。

先行した1・2班は11時前後に剣ヶ峰に登頂、13時15分には後続の班も吉田ルートの上久須志神社到着、全員そろって記念写真に収まった。エクアドル隊員の一人が体力的に問題があり、下山には予想外の時間がかかり、スバルライン5合目に到着したのは17時を過ぎてしまった。待機していたバスで宿舎の「赤い屋根」に戻ったのは18時を過ぎていた。一部の隊員の体力不足で予定外の時間がかかってしまったが、第一の目的であった富士山を全員が登頂することができ、今後の登山活動に課題を残したが、ひとまず一安心であった。

9月6日

上高地への移動の前に、リーダーのイレーネと昨日の富士山登山と今後の登山活動について率直な意見交換をした。結論的には、体調に不安のあるイレーネ以下2名については、本人の希望と隊の安全確保のために槍ヶ岳、立山両登山については別メニューを準備することにした。友好登山で事故に遭ってしまったら、何のための事業か、ということに危惧した対応である。

上高地への道すがら松本城に立ち寄り、昼食と観光をした。ここでの世話役は信濃支部長の東氏に担っていただいた。まず松本城の近くで昼食を取った。食事中になんと強いにわか雨が襲来し、傘も持たずに歩いてきたため食事場所から一步も出られない。松本城見学のスペイン語通訳もせっかくお願いしていたが、ついに雨宿りで時間切れ、残念ながら松本城は外観を見学して終わった。松本駅で上高地担当の女性スタッフ2名、沢渡と上高地で槍ヶ岳登山スタッフ3名と合流し、西糸屋山荘に投宿した。

夕食時には、東信濃支部長以下2名を交えての交流会を行い、東支部長から「ウェストン祭」の紹介があり、その記念品がプレゼントされた。

9月7日

リーダーのイレーネ以下3名は、女性スタッフと信濃支部松本氏の案内で上高地周辺の散策をすることにした。槍ヶ岳登山隊の編成は、スタッフ9名、エクアドル隊員10名の総勢19名を、富士山登山と同様に体力レベルで2班編成にした。

起床4時、まだ暗いうちの5時にヘッドランプを点けて西糸屋を出発した。早朝の天気は曇りがちだが、予報は快晴である。明神で夜行バスで駆け付けた最年少のスタッフが追いついてきた。さすがに足取りが軽い。横尾に到着したときには雲一つない快晴、前穂高岳の稜線や屏風の頭がくっきりと遠望でき、素晴らしい風景である。槍沢沿いの登山道に入り、槍見河原から槍の穂先を望み、槍沢ロッジ、大曲を経て水沢の水場で乾いた喉を冷水で癒した。この時点で、先行班との時間差は約1時間であった。殺生ヒュッテ分岐から槍の穂先を仰ぎながら最後の急登をジグザクに登り、槍ヶ岳山荘に到着。先行班は13時50分に山荘に到着し、その後山頂を往復した。後続隊は14時50分に山荘着、山頂往復をすすめたが、ルート上に大勢の人影が見えることや疲れもあるので明日の朝にしたいとの意向であった。明日の天気予報は早朝から雨予報だったので、頂上には今日中に登

ることを強くすすめたが、首を縦に振ることはなかった。山頂への執着心はあまりないのかも知れない。先行隊が頂上から下山してきたので、槍の穂先をバックに集合写真を撮影した。翌日の朝は予報通り、風雨が強くガスで視界がまったくなくなっていたので適切な対応であった。

山荘は、夏休みが終わった時期であったが、外国人登山者で混雑していた。エクアドルメンバーは夕食までの間、山荘内のカフェでビールなどを飲みながら大いに盛り上がっていた。

9月8日

4時に起床すると案の定、外は風雨が強くガスっている。昨日頂上へ行かなかったメンバーはさぞ恨めしいと思いきや、そうでもない知り、ちょっとがっかり。5時に朝食を取り、6時に風雨の中を槍沢へと下山した。さすがに殺生ヒュッテ分岐まで来ると風雨も弱まり、小雨程度の天気に回復、雨具も必要なくなった。横尾、徳沢、明神を経て、上高地に14時過ぎに無事に到着した。先行班は明神池をめぐり、後続班はビジターセンターを見学して、西糸屋で預かっていた荷物を回収して上高地山岳研究所（以下山研）に入った。

山研では、古野前会長、女性スタッフ、信濃支部スタッフが夕食会の準備をして待っていた。古野前会長から挨拶をいただき、乾杯、その後エクアドルメンバーの自己紹介と日本での登山の印象などについてスピーチがあった。皆さん、日本の山は緑豊かで暑いとの印象であった。

9月9日

手作りの朝食を6時に取り、山研の階段を利用して集合写真を撮った。その後バスターミナルへ移動し、スタッフが荷物番をして、エクアドルメンバーは散策や買い物を楽しんだ。上高地残留スタッフの見送りを受けて、バスにて高山観光に向かった。

高山では、陣屋から高山別院までの古い町並みを散策し、お土産の買い物や珍しい食べ物に舌鼓

を打っていた。日本の原風景を楽しんでもらった。ここも外国人観光客で混雑しているため、ラテンアメリカの楽天的気質で迷子になることをおそれたが、スタッフの気配りで事なきを得た。

途中の道の駅で昼食を取り、立山駅前の立山カルデラ砂防博物館を見学した。本会の副会長飯田肇先生の解説で明日登山予定の立山やカルデラについて映像を交えて解説していただいた。登山のための事前準備の一環として大変有意義であった。その後、国立登山研修所（以下登山研）に入り、鍛冶哲郎富山支部長以下6名の支部会員と夕食を共にしながら交流を行った。食卓には日本海の刺身を用意し、日本の食文化の豊かさを味わってもらった。

9月10日

朝から晴天に恵まれ、立山高原道路の桂台ゲートの7時オープンに合わせてバスで室堂に向かった。室堂までのバスの旅では、快晴の空の下、日本海から大日岳、劔岳、立山連峰、薬師岳と一望でき、日本アルプスの雄大さを楽しんだ。室堂には8時に到着し、8時30分に各コースに分かれて出発した。

今日は3コースを設定し、各自の希望でスタッフ9名と富山支部会員4名の皆さんと一緒に行動することにした。1班は一ノ越から雄山、大汝山、富士ノ折立を越えて大走りコースを下山、雷鳥平を経由し、みくりが池温泉に入浴して室堂に戻る。2班は一ノ越から雄山往復後に、みくりが池温泉入浴し室堂に戻る。3班は室堂山を中心に室堂散策後、みくりが池温泉入浴のコースであった。雄山の頂上では神主のお祓いを受けて万歳三唱を体験した。さらには、社務所でお神酒をいただくという作法まで経験してもらった。みくりが池温泉は、標高2410mに位置する日本一高所の天然温泉で、白濁した硫黄泉のかけ流しで疲れを癒してくれる。一部のメンバーは時間不足で入浴は叶わなかったが、日本で有名な霊山立山登山と温泉体験は身も心も清めて、日本文化の理解を深めたことである

う。15時には全員が室堂バスターミナルに集合し、無事に登山研に戻ることができた。

9月11日

名残惜しい登山研での滞在が終わり、米山所長以下登山研のスタッフの見送りを受けて、7時40分に立山駅前から一路バスで東京に戻った。途中のサービスエリアではアイスリームを楽しみ、お土産を買うなどして車内はリラックスモード。今日が誕生日のエクアドルメンバーもおり、車内での誕生会も行うなど、バスによる長旅もなんのそのである。国立オリンピック記念青少年総合センターに17時に到着した。

その後、事務局スタッフと、明日からの2日間の自由日の行動予定を確認し、エクアドルメンバーのサポートをするためのスタッフの配置を検討した。早速、夕食後に都内に出かける面々があり、渋谷界限、新宿界限へと出かけて行った。スタッフは新宿の登山用具店での買い物サポートや歌舞伎町の賑わいを案内した。

9月12日

自由日なので、各自の予定で行動した。ほとんどのバツイアー、大相撲観戦、クライミングジム体験、浅草三味線鑑賞、京都への日帰りツアーなど多種多様であったが、スタッフができる範囲でサポートして楽しい一日を夜遅くまで楽しんだ。

9月13日

昨日同様に各自の自由日。ジブリ美術館の見学、空手の由緒ある神社訪問、新宿への買い物など、スタッフが必要に応じてサポートした。

午後6時から送別レセプションを開催した。両国から37名が参加した。特に、在日エクアドル大使館からはマリア・エレナ・モレイラ公使をはじめ4名の参加があった。

開会にあたり、120周年記念事業委員会委員長の重廣から2019年からの交流事業の経過や2025年に日本山岳会が120周年を迎えること、そのときには是非雪を被った冬の富士山を見に来てほしいとの挨拶があった。来賓としてお迎えしたマリ

ア・エレナ・モレイラ氏からはエクアドルチームを日本に招待していただいた御礼、これを機会に益々友好の絆が深まることを希望するとの挨拶があった。乾杯の後、今回の富士山、槍ヶ岳、立山の登山活動の様子を映像で振り返り、友好合同登山の成功をお互いに祝った。最後に、記念事業委員の神長からこの度の交流登山を振り返り、これを機に今後とも登山者間での友好が深まることを期待した旨の挨拶があり、閉会となった。

9月14日

9時にオリンピック青少年センターをバスで出発、成田空港ではスタッフ一同が別れを惜しみながらエクアドルチームの帰国を見送った。

【まとめ】

足掛け5年にわたる交流事業が無事に終了した。コロナ禍がなければ2020年の9月には終了していた事業である。この間、特に何も行動できない空白の3年間はモチベーションを維持していくのが正直大変であった。この間のエクアドル側のフラード会長との密な連絡、ロシアやネパールの勤務地からエクアドルとの間を取り持っていた志賀先生、記念事業委員会委員長重廣氏の適切なアドバイス、そして身を粉にして諸準備に関わってくれた高野事務局の緻密な活動がなければ成功裏に終わることはできなかった。また、実際の活動に関しては2019年のエクアドルに参加したスタッフ、山梨、信濃、富山各支部の皆さん、協力を申し出ていただいた会員の皆さんの協力が不可欠であった。

友好合同登山の難しさは、単に外交上の問題ばかりではなく、来訪者の登山力を適切に把握して安全に事業を実施することである。2019年に日本隊がエクアドルを訪問する際には、6000m級の氷河の高峰をロープを結んで合同で登山するということが事前に登山経歴書を送付し、さらに隊員の現場での力量を判断してチームを編成した。今回は、日本の夏山登山、体力さえあれば登れるとの

判断で、各コースの案内などは事前に知らせたが、どの程度の登山力（体力など）があるのかは事前にチェックすることはしなかった。当然山岳会から推薦されて来る隊員ということが前提であるからである。結局、来日してから体調不良（体力不足）で槍ヶ岳登山などを諦めざるを得ないメンバーが出たことは想定外であった。事前にわかっていたら、当初よりトレッキング隊も準備していた。コロナ禍の3年間で先方の人選の仕方にも変化があったようである。

何はともあれ、登山日はいつも快晴で交流事業成功の大きな要因であった。こればかりは人の力ではどうにもならないことである。台風の襲来や局地的豪雨で日本列島の天気が不安定な時期であったが、山の神が我らに味方したと感謝したい。

Ⅲ 登山記録

1 富士山登山

中谷康司、前田文彦、渡邊雄二

前日、青少年センター赤い屋根（富士吉田市）に移動し、翌日に備え、エクアドルメンバーの自己申告に基づいて3班の編成を組んだ。宿舎4時出発、貸し切りバスにて5合目駐車場へ向かい、5時過ぎに準備ができた班から出発する。おおむね12時間を要したが、各々に富士山登山を楽しんだ。

A班は、エクアドル側がハビエル、エドワード、パトリシオ、ビニシオ、デニーズの5名、日本側が吉井、松尾、中谷の3名の8名のメンバー編成となった。A班は、普段からトレイルランニングをしているメンバーもあり、メンバーは至って健脚、最年長のデニーズもややスピードでは他のメンバーに遅れるものの、堅実な歩みで危なげがない。7合目を過ぎたあたりから、B班との距離が開き始め、やがてその差は顕著になった。できるだけ多くのメンバーで山頂写真を撮りたいとの思惑で、早く登りたがるメンバーを何とか抑えながら歩みを進める。剣ヶ峰集合との渡邊 PL の指示があったため、吉田口頂上から先行してお鉢を反時計回りして剣ヶ峰に到着した。遅れること約30分、B班が到着し、日本最高所でのA・B班合同での記念写真を残すことができた。登っているC班とは地形的に無線が通じなかったが、吉田口下



富士山吉田口頂上にて

山道入口でやっと無線が通じた。間もなく吉田口山頂に到着するとのことで、下山道をやり過ごし、吉田口山頂にて全班での集合写真も残すことができた。その後、走りも交えて15時過ぎには下山し、他班を待って2時間のビールタイムを楽しんだ。

B班は、エクアドル側がファブリシオ（エステベス）、マリ、フェルナンダ、アンドレア、パウル、ファブリシオ（ペニャ）の6名、日本側は荒木、三浦、前田の3名で登り始めた。エクアドル隊員が後続のC班を気遣い、班の隊列が間延びすることが多かった。また、登り・下りともC班と随時メンバーを入れ替えての行動となる。タイムリミットの10時を過ぎての吉田口山頂到着となったが、渡邊 PL より剣ヶ峰を目指す許可があったため、剣ヶ峰を目指した。A班と合流、両班に高野を加えた18名で写真を撮ることができた。C班と合流し、改めて山頂を楽しんだ後、13時に下山を開始した。下山時は、脚の痛みを訴えるC班メンバーのサポートなどでメンバーが錯綜し、スピ



ード差も相まってB班のスタッフは隊列管理に苦勞することとなった。しかしながら、A班に迎えられ17時過ぎに全員無事に5合目に到着することができた。

C班は、エクアドル側がイレーネとルイス、日本側は志賀、高野、渡邊の5名である。メンバーの申告により、ゆっくりと山頂を目指した。腰痛を訴えるイレーネのサポートもあり、B班とメンバーを入れ替えながらの登高となった。B班からサポートに入っていたアンドレアとパウルを、途中から高野が率いてスピードを上げ、剣ヶ峰でA・B班と合流、全体写真に収まることできた。13時15分、残るイレーネとルイスもどうにか吉田口頂上久須志神社に到着し、今回の富士山登山に参加した全員がその山頂に到達して、登頂記念写真を撮ることができた。C班は下山にも時間を要したが、17時10分、スバルライン5合目に到着し、本山行を無事に終えることができた。

この富士山登山でエクアドルメンバーのチームワークや各人の登山の力量も推し量ることができた。

2 槍ヶ岳登山

吉井修、渡邊雄二

富士山登山を終えて、エクアドル側のイレーネ、ルイス、ファブリシオ（ペニャ）の3名は上高地散策をすることになり、槍ヶ岳はA班＝エクアドル側がハビエル、エドワルド、パトリシオ、ピニシオ、フェルナンダの5名、日本側が高野、中谷、吉井の3名の計8名、B班＝エクアドル側がフォブリシオ（エステベス）、マリ、アンドレア、パウル、デニーズの5名、日本側が片岡、荒木、三浦、志賀、渡邊の5名の計10名で出発することになった。

起床は午前4時、上記の班編成を行った上、西糸屋の弁当を持って、まだ暗い5時にヘッドランプを点けて出発した。5時50分明神について各々朝食を取っていると、夜行バスでやってきた田島

がバスターミナル→明神間を20分で駆けて、追いついてきた。最若手の田島はA班に編入。明神を出てまもなく、ペースを抑えることを目的に先頭は中谷から吉井に交代した。早朝の天気は曇りがちだったが、横尾に到着したときには雲一つない快晴、前穂高岳の稜線や屏風の頭がくっきりと遠望でき、素晴らしい風景になった。

槍沢沿いの登山道に入り、槍見河原から槍の穂先を望み、9時40分槍沢ロッジに着く。ここからA班が先行した。1時間に一度、休憩を取るつもりであったが、約1時間登ったところで、冷たい水が得れる水沢の水場まですぐだと下見をされた高野さんがおっしゃる。ところが、天狗原分岐を経て水沢の水場に着いたのは11時45分。9月とは思えぬ暑さの中、2ピッチ分を休まずに登ったことになる。B班が水沢の水場に着いたのは1時間後であったという。長めに休んで、冷水で乾いた喉を潤したが、高野さんは槍ヶ岳山荘の宿泊手続きを行うため、先行された。12時45分播隆窟で休もうとすると、今度はハビエルとエドワルドがさっさと頂上へ向かおうと言って止まらない。殺生ヒュッテ分岐から槍の穂先を仰ぎながら、最後の急登をジグザクに登っているとA班唯一の女性フェルナンダがへばってきている。全然休まないのだから～という話だが、それは私（吉井）のせいではない。A班はみな強い。おかげでA班は13時40分に槍ヶ岳山荘に着いた。天気の良いうちにと、A班は14時20分～15時30分の間で頂上を往復した。ガスが出て、展望も十分とは言えなかったが、記念撮影もたくさんして、槍の穂先を楽しんだ。

一方、B班は14時50分に山荘に到着。明日は台風13号の接近で未明から雨予報、渡邊隊長は本日中の山頂往復を強く勧められたが、ルート上に人が大勢いること、疲れもあることから、エクアドル側は首を縦に振らなかったという。夕刻、両班揃ったところで、槍の穂先をバックに全員で集合写真を撮った。

翌日4時に起床すると案の定、風雨が強くガスっている。昨日頂上へ行かなかったB班エクアドル隊員はさぞかし恨めしいと思いきや、そうでもない。頂上にこだわらない姿勢は予想外。5時に朝食を済ませ、6時、風雨の中を槍沢へと下山を急いだ。幸いにも殺生ヒュッテ分岐まで来ると風雨も弱まり、小雨程度の天気回復、雨具も必要なくなった。先行したA班は9時40分には横尾に到着、後続のB班の動向をうかがいつつ、明神



槍ヶ岳頂上



からは右岸を進み、嘉門次小屋で囲炉裏の横で岩魚の塩焼きを食べた。B班は往路を下り、ビジターセンターを見学して、14時過ぎに河童橋で両班合流して登山を完了した。西糸屋で預かってもらっていた荷物を回収して、上高地山岳研究所に入った。

3 立山登山

松尾みどり

友好登山の締めくくりは秋晴れの立山だった。早朝、国立登山研修所を出発。室堂バスターミナルで4班に分かれ、それぞれが体力や趣向に合わせたコースを楽しんだ。

A班 中谷康司

スピードの速いハビエル、エドワルド、パトリシオ、フェルナンダに、STAFFの田島、高野、中谷を加え7名のパーティー。コースは室堂～雄山～大汝山～富士ノ折立～真砂岳を回り、大走りを駆け下りて、さらに温泉を楽しもうというもの。一ノ越まで約30分とチームは力量通りの速さを発揮、その後も危なげない歩み(走り)でコースを回った。雄山神社への参拝と万歳三唱、各ピークでの記念撮影なども楽しんだ。真砂岳で「走れー！」と高野さんが走り出し、全員ダッシュで登る。先ほどまで別山乗越まで行こうと言っていたメンバーたちも流石にお腹一杯になったようだ。最後は、山行後の温泉・ビールを堪能して、日本での登山活動に有終の美を飾ることができた。

B班 松尾みどり

B班は吉井さんと共にデニーズ、パウル、アンドレア、マリセラ、ファブリシオと計7名のパーティー。A班と同じコースをゆっくりと景色を楽しみながら歩いた。雄山神社と大汝休憩所ではお土産を購入し、真砂岳山頂でおにぎり弁当を食べた。道中彼らが山で歌う歌や、植生の違いを教えてもらった。地獄谷の様子はエクアドルのピチンチャ山と似ているようだ。途中雷鳥も顔を出し、終始恵まれた山行だった。

C班 渡邊雄二

雄山山頂往復後、みくりが池温泉入浴コース。エクアドルメンバーはペニャとバルバ、富山支部の鍛冶支部長と山田氏、志賀先生、そして渡邊の6名で行動した。室堂を8時30分に出発し、快晴

の下、爽やかな風に吹かれながら一ノ越へ9時30分に到着した。これまでに登山した富士山、槍ヶ岳が遠望でき、この素晴らしい景色にエクアドルメンバーは大感激。

その後、稜線通しに山頂に10時55分到着。神



立山雄山山頂（上）、室堂散策（下）



室堂にて

主のお祓い、万歳三唱を体験、エクアドルメンバーがお神酒を持参してきたのにはビックリ。下山路も周りの景色を楽しみながら下り、みくりが池温泉に13時00分到着。ルンルン気分で霊山立山と日本最高所の温泉を楽しんだ。

D班 荒木輝夫

D班は室堂山からみどりが池周回コース。メンバーは、飯田日本山岳会副会長がガイド役で先頭を、富山支部の松本氏、イレーネ会長、彼方で私がお世話になったルイス氏、最後に私の5名。遊歩道を1時間ほど進み、途中のベンチで小休止。見渡す限り緑と青とカルデラの織りなすコントラストは、まるで絵葉書の中にあるような景色に皆圧倒され、集合写真を撮る。下りでは、富士山で膝を痛めたルイスは辛そうだった。

下山後、玉殿の岩屋、日本最古の山小屋である立山室堂を見学。室堂山荘で昼食を取り、みどりが池、みくりが池をあとにエンマ台に立つ。最後にみくりが池温泉に浸かり、本日の疲れを癒す。

4 上高地散策

本多幸子

メンバー：イレーネ、ルイス、ファブリシオ（ペニャ）、松本（信濃支部）、藤田、本多

9月7日（木）コース

8:30 西糸屋→9:00 ウェストン碑→9:20 穂高橋・田代橋→9:50 河童橋（休憩）→11:20 穂高神社奥宮・明神池→13:00 河童橋→13:10 ビジターセンター（昼食）→13:40 西糸屋（エクアドル隊員3名宿泊）→14:00 JAC 山岳研究所（松本、藤田、本多3名宿泊）

9月8日（金）コース

9:00 西糸屋→バスターミナル（大正池までバス利用）→10:30 大正池→11:00 田代池→11:25 帝国ホテル（ティータイム）→12:40 河童橋→13:00 西糸屋→13:20 JAC 山岳研究所

上高地散策案内は予定にはなかった。9月5日の富士山登山の下山でエクアドル隊員の2名が足のトラブルになり、槍ヶ岳登山が無理と判断。仕事で上高地滞在を希望していた1名も加わり、2日間案内することになった。

9月7日早朝、槍ヶ岳に向かう本隊を見送る。エリアに詳しい信濃支部の松本氏が案内役を引き受けてくれたので心強い。朝食後、西糸屋を出発、ウェストン碑に向かう。ウェストン碑の前で毎年6月信濃支部主催のイベントが行われることなどを説明する。快晴で穂高橋からの穂高連峰が美し



焼岳をバックに大正池にて

く見える。

河童橋で休憩、ソフトクリームを買う。夏休み中は人が多く行列だったようだが、平日ということもあり、混雑はなかった。小梨平キャンプ場を通り、穂高神社奥宮へ。明神池で一人ずつ山の安全を祈る。梓川右岸道を通り、河童橋に戻る。途中、釣り禁止区域で保護されているのでイワナの姿が良く見られた。昼食を取るのに良い場所を探し、ビジターセンター脇のベンチでお弁当を広げる。昼食後は少し疲れた様子だったので、ファミリーシオの仕事の時間に合わせてエクアドル隊員 3 人を宿泊先である西糸屋に送る。

9月8日、昨晚から雨が降り続けて天候の心配があったが、西糸屋に迎えに行くころには上がっていた。

山研の管理人から 1 人留守番を頼まれたので、藤田隊員が残り、5 人で散策することになった。

エクアドル隊員 3 人に足の具合を聞き、歩けることを確認してからスタート。バスターミナルに向かい大正池までバスで移動。大正池では雲が多いながらも、焼岳や穂高連峰の眺めが良かった。田代池に寄り、帝国ホテルでティータイム。本隊が予定より早く戻ってくると連絡が入り、西糸屋に 3 人の荷物を取りに行き、宿泊先の山研に行く。上高地の知識があまりない私が案内役では不安だったが、松本氏のおかげで充実した 2 日間となった。3 人も美しいエリア散策を満喫していた。

IV 支部との交流 (日本・エクアドル友好 合同登山隊との交流会に参加して)

1 山梨支部

古屋寿隆 (山梨支部事務局長)

エクアドルとの国交樹立 100 周年と当会創立 120 周年を記念し、その交流事業として同国登山隊が富士山を登るので参加協力してほしいと、最初に渡邊雄二栃木支部長・日本側プロジェクトリーダーから連絡があったのは 2019 年夏のことでした。すでに日本隊が国際交流事業としてエクアドルを訪問登山し、その後、東京 2020 オリンピ



山梨支部との懇親会

ックが終わった秋に、今度はエクアドルの登山隊が訪日するとのことでした。ところがご存じのように世界的なコロナパンデミックが起り、延期やむなく、ようやく本年 2023 年 9 月にこの交流事業が行われることとなりました。

日本での最初の合同登山は富士山に決まっております、2019 年当初は山梨支部も富士山に同行させていただき予定でしたが、今年は残念ながら都合つかず、合同登山には参加できませんでした。登山前日は地元の富士吉田市に宿泊することもあり、山梨支部会員 3 名が前夜の食事会に参加することになりました。宿舎のすぐ近くのお好み焼き食堂を借り切った交流会は、みな初対面にもかかわらず、楽しく活発な懇親の場となりました。我々はスペイン語は話せません。志賀尚子先生に通訳をお願いしたり、身振り手振りだったり、スマホの翻訳機能を使って話はずみ、あつという間の 2 時間が経ってしまいました。エクアドルの登山隊は同国のそうそうたるメンバー、隊員の職歴も目を見張るもので、いかにも代表にふさわしい方々でした。

翌日の富士登山に備えてお酒は控えめにしようと宴席に臨んだのですが、終わってみれば双方とても上機嫌、山梨支部差し入れの赤白葡萄酒の一瓶瓶もすっかり空になりました。Irene Ponce リーダーはじめ、皆さまとの記念写真もたくさん撮らせていただきました。また、交流記念にエクアドル・ソンプレロハットを頂戴したり、翌日快晴の富士山頂からの登頂写真も早速送っていただきました。ありがとうございました。

また、この事業は東京・山梨・信濃・富山と 12 日間の長期にわたる交流事業でした。計画段階から無事終了するまでこの事業実施に尽力された渡邊雄二リーダーはじめ、スタッフの皆様には厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

2 信濃支部

東英樹（信濃支部長）

9 月 6 日。松本城バス駐車場にてエクアドル隊を出迎える。バスに入って歓迎の挨拶。昨日、富士山に登ってきたとは思えないほど皆元気だ。松本城の公園を横切り、ボランティアガイドのところにスペイン語を話せるガイドがいて立ち止まる。やはり母国語を話すことは安心、安堵するのだろう。昼食に大名町通りの「和食そば処たかぎ」の 2 階を利用。ここは蕎麦道場もやっており、海外の方の人气が高い。それぞれに注文して昼食を楽しむ。昼食を終えて 1 階でお土産を買い、外に出ると雨。松本城見学は外から見るだけでスルー。内見すればなお楽しかったのに残念。駐車場でいったんわかれて、松本駅で本多さん、藤田さんをピックアップし上高地に向かう。山研で食料を下ろし、西糸屋へ。エクアドル隊面々も西糸屋に着き、部屋割り、諸注意、夕飯時刻などのミーティ



東支部長とイレネ会長（上）、西糸屋山荘での信濃支部との懇親会（下）

ング。さすが志賀様、語学に長けていることは凄いことです。

18時30分から支部との交流会。支部長・東と総務部長・松本で対応。もっと多くの支部員が対応してくれると良かったが、失礼しました。東が、前日学習した片言のスペイン語で簡単に歓迎の挨拶、支部の現状説明、支部最大行事のウェストン祭の説明。支部からは松本産の「手毬」、ウェストン祭（英文説明付）の記念品、手ぬぐいと手彫りのブローチを全員に進呈。続いて、松本総務部長挨拶。エクアドルメンバーにはそれぞれ自己紹介をしてもらい、和気藹々のうちに明日も早いので、明日の朝食、昼食の弁当を各自持ち帰り、就寝。

9月7日。早朝5時西糸屋発、脚がなんともなければ槍に随行したのに悔やまれる。東は松本に下るが、松本さん、藤田さん、本多さんは残留組カルロス、ペニャ、イレーネ・ポンセさんと上高地散策。

9月8日。午後に松本でシャインマスカット、ナガノパープルを調達し、山研に。夕闇せまる中で、古野前会長も出席し、お疲れ様会。山研の山田さん、本多さん、藤田さん、松本さんの手作り料理でもてなす。皆さん日本の山の印象を語るが口々に「暑かった」と、地球温暖化で9月の頭でも高温多湿。エクアドル首都キトで2800m超え。日本の山はなんてことないか!? でも、本当に皆様お疲れ様でした。

9月9日。上高地バスターミナルで見送り。

全行程に付き添われた PL 渡邊様、事務局高野様、ほか皆様は本当にお疲れ様、ご苦労様でした。また、それぞれの山と一緒に登られた方、お疲れ様でした。西糸屋、槍ヶ岳山荘の協力に感謝。

3 富山支部

鍛冶哲郎（富山支部長）

～エクアドル訪日団との友好交流登山 立山～

9月9日（土）15時、立山カルデラ砂防博物館に貸切バスで到着の両国登山隊を迎え、同博物館の飯田学芸課長（日本山岳会副会長）の案内で博物館内を見学し、立山にも氷河が存在することなど立山の自然についてレクチャーを受けた。

国立登山研修所に移動し、ガイドンスで立山登山に備えて班分けなどを行う。18時から懇親夕食会。両国登山隊の他、登山研修所の米山所長と富山支部からは木戸、松本、山田、鍛冶、中西、飯田の6名が参加。ビールで大いに盛り上がり、日本側を代表して富山県山岳連盟会長でもある中西会員がダンチョネ節で美声を披露したのに対し、エクアドル隊は全員で「アボカドの歌」を歌った。私は初めて聴く歌であったが、エクアドルでは誰もが知る愛唱歌なのであろう。自己紹介を兼ねて一人ずつ行ったスピーチでは、エクアドル側は日本の印象を、日本側は歓迎の意を述べた。エクアドル側は日本の緑の豊かさ・美しさと伝統文化に好印象を持ったようだ。エクアドル隊の一人が「規律正しく、軍隊生活のような毎日だ」と言ったときは、さもありませんと笑ってしまっただが、スケジュール管理に気が休まるときのない渡邊隊長の苦勞に思いを馳せた。20時までには食堂の片付けも終わって、入浴、明日に備えて早々に就寝。

9月10日（日）5時半朝食。両国登山隊一行は



国立登山研修所での富山支部との懇親会



国立登山研修所前にて

貸切バスで、富山支部の4名（松本、山田、飯田、鍛冶）は登山研修所と博物館の車で、桂台ゲートが7時に開くのを待って室堂に行く。室堂からは、雄山山頂往復コース（エクアドル2名、渡邊、志賀医務官、山田、鍛冶の6名）、立山三山から真砂・大走り・雷鳥沢コース（5時間組と7時間組の2班）、室堂周辺コース（ガイドは飯田、松本が参加）の3コース・4班に分かれて出発した。

当日の下界は依然として猛暑であったが稜線の風は爽やかで視界が良く、一行が登ってきた富士山や槍ヶ岳を望むことができた。雄山山頂に着く頃にはガスが出てきたが、室堂に戻ってきた隊員はいずれも晴れやかな満足顔であった。立山縦走7時間コース班以外は下山のバスまで時間の余裕があったので、大方のエクアドル隊員はみくりが池温泉に入ったようだ。さぞかし芋の子状態であったことであろう。

言葉の壁でままならぬコミュニケーションではあったが、山田会員がスーパーマーケットで調達したエクアドル産のバナナを、山上でエクアドルの2人に振る舞ったのはささやかなサプライズであった。エクアドル隊は刺身や温泉に対する抵抗はなく、積極的に日本を体験しようとする旺盛な意欲を感じた。エクアドルといえば、ガラパゴス島しか思い浮かばなかった私だったが、この友好交流登山に参加して、国名はスペイン語で赤道の

意であること、海拔6310mのチンボラソは国内最高峰であるばかりでなく、その頂上は地球の中心から一番離れているのでエベレストより高いという見方もあること、バナナはエクアドルの主要輸出産品のひとつであることなど、遅まきながらエクアドルという国について少し視野が広がった。このような機会を与えていただいたことについては、渡邊隊長をはじめ随行の山岳会員諸氏、志賀医務官、休日にもかかわらず施設使用の便宜を図っていただいた登山研修所長の米山氏など関係者の労によるもので、深く感謝いたします。

4 山研での懇親会

藤田礼子

9月8日、上高地は早朝から大雨である。槍ヶ岳から下山予定のメンバーのことが気に掛かる。幸い朝食を食べ終わる頃には雨も上がってきた。

信濃支部の松本さんの提案で、エクアドルメンバーを今日は大正池方面に案内した後、上高地帝国ホテルの限定プリンでティータイムを優雅に過ごすらしい。管理人が買い出しで留守となるため、お一人で買い物を引き受けて下さった古野さん、自宅から再度合流する東支部長を待つため、残念ながら私は山研で待機することになった。

お昼過ぎ、沢山の食材の買い出しを済ませた古野さん、差し入れを沢山持って東支部長、上高地

散策隊も戻り、懇親会準備の手配ができた。

予定通り槍ヶ岳登山メンバーも到着。総勢約 30 人が全員集合し混乱が予想されたが、山研でのエクアドルメンバー、JAC スタッフはまこと見事に行動して混乱はほとんどなかった。ゲストが交代で入浴を済ませている間に懇親会の料理準備を開始する。

エクアドルでは、1~2 人ずつホームステイ先でそれぞれ各家庭料理でおもてなしを受けたが、今回日本で初めての手作りでの食事会である。果たして喜んで食べてもらえるか、また限られた中でのおもてなし料理に少々頭を悩ませたが、我々が日頃家庭で食べている料理に決めた。と言っても準備時間も限られており、また 30 人分となると手の込んだものは無理である。そこで日本の誇る冷凍食品が大活躍することになった。皆で手際よく作業し、時間通り懇親会を開始することができた。

古野さんの音頭でいよいよ乾杯というところで、ハプニング発生！ ビールをグラスに注ぐ段階で今流行りの缶生ビールのためにグラスに注ぐ前に折角の泡が溢れ出し皆アワアワ！ 会場は一気に賑やかな雰囲気になる。

しばしの懇談後、信濃支部長が歓迎挨拶で得意の喉を披露すると、すかさずファブリシオ・ペニ

ャさんが管理人のギターを弾きながら美声を披露し、会場は一つになり大いに盛り上がる。

和やかな雰囲気の中、ゲストが一人ずつ自己紹介を始める。皆さん「私の名前は……」と日本語で名前を披露する。来日前に日本語の勉強会をしてこられたとか。限られた時間、言葉の壁はあったものの、和やかに楽しい交流であった。今回このような機会に参加させていただき、貴重な体験となった。



山研前にて



山研での懇親会

V 同行記

1 ロス・エクアトリアーノスの印象

三浦拓朗

まずは、当記念事業の末席に加えていただいたこと、そして隊員ならびにご協力いただいた皆様に、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

海外、それも南米エクアドルの友人と日本の山を登るという人生初の体験、そんなロス・エクアトリアーノス（エクアドル人のみなさん）の様子について拙述させていただく。

来日した 13 人、年齢も性別も体格も当然異なるが、いざ山に入れば、体力に個人差はあれど住む場所が標高 2800m なだけに、富士山程度では高山病などまったく無縁。特にホストファミリーだったハビエル氏は彼の地のトレラン選手で、重力を操作しているのではないかと疑うほど強いし速い。富士と槍の下山後に「¿Estás cansado? (疲れたか?)」と聞いてみたら、即座に「¡No!」と返ってきた。おうむ返しに「¿Y tú, cómo estás? (お前はどうか?)」と聞かれた私の答えは「Tengo hambre... (腹減った...)」。

むしろ、富士山特有の急なザラザラの下りや、槍ヶ岳の長いアプローチのほうの問題で、富士の下りでは脚を痛めてしまったメンバーも（ハビエル氏はものともせず）。槍ヶ岳では、山荘に到着したその日の夕食までの空き時間に、穂先の往復に誰も行きたがらない。長丁場で疲れてしまったかな？ たしかにエクアドルの山は登り出すまでのアプローチは短かったし、その違いは彼らも指摘していた。

ちなみに、四季が明瞭で動植物の多い日本の山の環境には興味津々。サルが出てカエルを見かけても、歩みを止めてしばし観察。立山でライチョウに会えたことも、運が味方してくれたに違いない。

山から下りてくれば、お待ちかねの食事。食文



槍ヶ岳山荘手前（上）、女性 4 人の歌とダンスで盛り上がる（下）

化の違いもあって心配したが、みんな日本の食事に次第に慣れたようだった。慣れない箸に戸惑いつつも、ラーメンに餃子、鶏の唐揚げは大好評。とくに懸念だったのは魚を生食する文化がないだけに、寿司や刺身である。案の定、初日の歓迎レセプションで握り寿司が並び、前出のハビエル氏は最初の一口、表情も硬く、半分目を瞑って口へ運んでいた。すぐに問題ないことがわかるや、数日後には慣れた様子で醤油につけて「Está rico. (美味しいな)」。その横で味噌汁をすっかり気に入ったのはフェルナンダ女史、何杯もおかわりしていた。

そしてみんなビールが大好き！ ほとんどのメ

ンバーが初体験の日本酒も大好評！　そしてお酒が入れば、唄う踊る、まさにラテンの印象そのものである。ロス・ボラーチョス（Los borrachos=酔っ払い衆）のテンションは高くても、それを決して宵越ししない強さと心がけには感心するしかなかった。

立山へ向かう道中、志賀先生が「前回より盛り上がっているね」とおっしゃったが、それは私もまったく同感である。各所で撮影した集合写真を見返せば、みんな心からの笑顔で写っている。新たに SNS でつながった隊員ともども、この原稿を推敲している時点でも、コンスタントに連絡を取りあう仲である。

Nada es eterno en esta vida.

（人生に永遠のものはひとつとてない。）

パトリシオ氏が教えてくれた、エクアドルの諺である。似た言葉は日本の人口にも膾炙されているし、それはたしかにそうなのだが、この縁がどうか末永く、末永く続くように、強く願ってやまない。

2 エクアドルのメンバーと同行した感想

荒木輝夫

今回の来日 13 日間のうち 9 日間を共に過ごしたが、エクアドル隊は誠に明るい。歓迎レセプションから始まり、バスによる移動ではいつの間にか後部座席をラウンジ形式に変えてしまい、談笑が絶えない。

信濃支部、富山支部との懇親会では、持前のラテン系音楽の披露はお手のもの、皆明るく楽しい仲間達であった。

なお、私事であるが、別れ際、彼方でお世話になったお二人各々に「高崎達磨」に「Dennys」「Luis」と名を入れたものと、地元の山「谷川岳：大吟醸酒」をお持ちいただいた。



明るく愉快的な仲間たち

3 【Vamos !】

田島圭吾

私がエクアドルを訪れたのは 4 年も前のことになる。そのときは今よりも弱く、精神的にも未熟であった。付け焼き刃でコトパクシ（5897m）に挑み、酸素の薄さで山岳部 1 年生のようにグロッキーになり、つながったロープをグイグイと引かれたことを覚えている。ホームステイ先ではホストファミリーに文字通り子どものようにお世話になった。そして、私はそんな思い出を振り返って、彼らとの 4 年ぶりの再会にあたり、慣れ親しんだ北アルプスで自らの成長を見せつけてやろうかと密かに思っていたのであった。ここら辺の精神性はまだまだ子どもであると自覚せざるを得ないのだが……。

槍ヶ岳山行からの合流となった私は、夜行バスで上高地へ向かい 1 時間前にすでに出発した本隊を追う。久しぶりの再会で心躍り、上高地から明神館のコースタイムは自己最速を記録した。合流したエクアドルの面々、中でもホストファミリーのパトリシオとの再会は喜ばしかったのだが、如何せん言葉が出てこない。文明の利器「翻訳機」

で自分が山に関する出版社で働いていることを伝えた。私が山の業界に関わりたいと思ったきっかけの1つにエクアドルの遠征があり、その成果を何よりも伝えなかったのだ。それを聞いてパトリシオ以外も喜んでくれ、私はやはり褒められた子どものように誇らしい気持ちになった。そして一緒に山へ登り、猿を見て興奮し、暑さにバテたりする彼らを見ながら、私は日本の山を知った気になっていた。

知った気になっていたというのは、彼らの日本の山での感想を聞いたからだ。彼らは日本の山にある信仰心について興味深いと言った。私にとっては山頂に祠があり、麓に神社があるのは当然に感じていたので、予想外の答えだった。エクアドルには植民地時代がある。植民地時代に元々あったインカ帝国時代の神殿は失われ、それを土台に教会が建てられた。旧来持っていた価値観は植民地支配を経て継承できなかったのである。山を信仰した歴史はあれど多くは継承されず、その深くを知ることが叶わなくなってしまった彼らにとって、日本の山岳信仰の姿はあったかもしれない山との関係性のようだ。残念ながら私は元々、山に登りながら信仰に重きを置くことはなかった。むしろ、山という遊び場に縛りを加える枷なのではと思うほどだった。しかし、彼らと山に登り、日本に残る山岳信仰の貴重さに気が付かされたというわけだ。私は山に慣れてきたと思っていたが所詮は運動能力を向上させただけで、真に山に慣れ



「Vamos」いつも元気な4人

たということではなかったのである。

彼らと一緒に山に登って、理解できない部分もあった。彼らは中々休憩をしないのだ。交流登山だし、ゆったりした方が良いかと思い、休憩をとろうとすると「Vamos」「イキマショウ」と言ってくる。毎度毎度、笑顔で言われるものだから、つつい調子に乗ってグイグイ歩いてしまう。交流登山なのにそこそ良いペースで歩いてしまうのが印象に残った。あの「Vamos!」は私と同じで、高所に住む山岳民族としての意地を見せられたのか定かではない。それであれば、十分に気持ちがわかるのだが……。

交流登山は言葉が通じないながらも賑やかで、その直後の山行は物寂しく感じられた。私たちが行き、彼らが来たことで交流事業は終わってしまったが、遠い親戚のようにたまには会いたいものである。そして、自分の成長を見てもらえればと思う。

4 登山時以外のエクアドル隊

吉井修

エクアドルのメンバーの登山時以外の様子で、印象に残ったことをいくつか紹介しよう。

- ① 都内から富士山へと出発した9/4(月)、彼らは榮和交通の貸切バスに乗ると、誰も教えていないのにあつという間に席を動かし、後部座席をサロン風、宴会向きに組み替えてしまった。こんなに座席を動かせるとは私も知らなかった。狙いは明らか、さすがラテン系、楽しくなることに目鼻の効く人たちだなと思った。
- ② 談合坂 SA、彼らは早速ソフトクリームを目ざとく見つけて群がった。エクアドルにオレンジ系の柑橘類やバナナはたくさんあるが、桃とぶどうのアイスクリームはありません、と。また、アイスクリームはあってもソフトクリームはないのか？
- ③ 山中湖畔の「小作」でランチ。隊の目論見は

名物の「ほうとう」を食べてもらうことだったが、13名中、お腹の調子がいまいちだった一人を除いて、みんな「海老天重」をオーダー。日本に来たなら、まずは天ぷらと思っていたようだ。全員箸を使ったが、ご飯を食べるのに時間がかかるので、スプーンを出そうとしたら、あくまで箸で食べると。最後までスプーンを使わなかった。

④ 槍ヶ岳に向かう 9/6 (水)、ランチは松本城近くの「和食そば処たかぎ」。ここも蕎麦を味わってもらおうと考えていたが、結果は山賊焼き 9、天井 4 で、蕎麦は 0。山賊焼きの圧勝。食欲旺盛で大多数は肉に走ってしまった。そしたら、西糸屋の夕食にも山賊焼きが～。ほら、言わんこっちゃない。

⑤ 立山から下りてきた 9/10 (日) の夕食後は非公式の自由な懇親会。お酒が進むと彼らは空いた酒瓶をマイク代わりに歌いだした。こうなるともうカラオケ気分？ ラテンの血が騒ぐ？ どんどんノリノリになった。日本側も誰か一曲をとなり、私は「アルプス一万尺」と「幸せなら手を叩こう」を歌った。前者は途中から即興で作詞したので、その部分を書き留めておこう。「コトパクシはいい山、富士山と兄弟、とつてもきれいな山だよ。ランラララ ラララ～」、「チンボラソはすごい山、地球の核から一番たーかい山だよ。ランラララ～」。幸せなら手を叩こうでは、みんな、態度で示してくれた。この新しい友人は本当愉快であることよ。

⑥ 東京に戻っての第 2 夜=9/12 (火) の夜。「1day はとバスツアー」を楽しんだエクアドル隊員 9 名と八重洲でしゃぶしゃぶ食べ放題。お腹いっぱい動きづらい状況にあったが、浅草の居酒屋に 21 時～の津軽三味線ライブを聴きに移動。駅からそれなりの距離を歩いたが、津軽三味線の演奏が始まると皆、元気に聴き入った。ちなみに 9 名以外の 4 名は、京都往復 1 名、クライミングジム 1 名、大相撲 2 名。山登り 3 連発の疲れも残っておろうにこの元気さは大したもの。

⑦ 実質最終日の 9/13 (水) は 6 時～明治神宮散

策、朝食後、私は 6 名を連れて、新宿モンベル→ヨドバシカメラ→栄寿司 (ランチ) →ダイソー→NEWoMan と新宿を回った。最後にもう一度、スクランブル交差点を見たいというので渋谷に移動して自由時間を設けた (数名は 9/11 (月) タとの渋谷 2 回目)。彼らにとって渋谷は有名な名所であった。

以上、記憶に残った点を取り留めなく書いたが、エクアドルは赤道直下の国、そのせいかメンバーは陽気で明るく愉快であった。彼らは来日が延期になったコロナ禍の 3 年のうちに日本語の挨拶を覚え、箸の使い方を練習して、もちろん山登りは絶えず続けて、来日してくれた。送別会の席で渡邊隊長が述べられたように、3 年の歳月は彼我の距離を近づけても遠ざけるものではなかったことをとても嬉しく思った。

5 自由日の観光サポート (ファブリシオ 夫妻編)

松尾みどり、中谷康司

中谷、松尾のホストファミリーであったファブリシオ (エステベス)、マリー夫妻は、夫が武道 (合気道や居合道) を嗜むこともあり、エクアドル訪問時から日本に対する興味が強く、かなりの親日家だった。そんなこともあり、彼らの観光に対する熱意は凄かった。来日前から SNS で連絡を取り合い、彼らの 10 を超えるリクエストを自由日の 4 日間に詰め込んだので観光は連日かなりのハードスケジュールとなった。

9 月 1 日、本隊より 2 日前入りした彼らを成田空港に迎えに行ったその日から私たちのおもてなしという名の戦いは火蓋を切ったのである。到着したばかりの彼らをまずは成田空港からほど近く、武道の神様で剣聖 (飯篠長威齊家直) も眠る香取神宮へ案内した。その後、レインボーブリッジから都内に入ると主要なランドマークをまずは車で一通り回ることから始めた。

彼らは買い物に対する意欲が極めて高く、家電量販店、山道具屋、漢方薬局など彼らのリクエストに基づいて多くのお店を案内した。しかし、家電や山道具は値段がエクアドルとあまり変わらず、漢方薬は予想を超えた価格で、それらのほとんどは購入に至らなかった。唯一、ファブリシオの購買意欲を強くそそいだのは、中谷お勧めの武道具店だった。エクアドルでは購入できない武具の数々にファブリシオの財布の紐は緩みっぱなしで、マリーの顔を伺いながらせつせと刀や袴を購入していた。一方、小学校の教員であるマリーが興味を示したのは100円ショップで、生徒たちへのお土産を持ちきれないほど購入した。キティちゃんやポケモンなどのグッズを手にし、「これも100円なの!？」と彼女は終始驚きっぱなしだった。その他にも夫妻の愛娘へのお土産を買いにバレエショップ（新体操の道具を購入）を訪れ、神保町の専門店でも両親のための浮世絵を物色するなど、本当にさまざまなお店を回って買い物をした。親戚へのお土産は、松尾の勤めるノースフェイスで選び、市場で手に入らないものは夜な夜なネットで探して、注文した。



スカイツリーにて

観光も、朝の築地市場での食べ歩きに始まり、皇居の散策や大相撲の観戦（升席）、スカイツリーから東京の夕焼けを眺め、夜は浅草寺詣、最後は渋谷でハチ公とも写真を撮るなど、本当に盛りだくさんだった。我々は同行しなかったが、ジブリ美術館や、先に挙げた大相撲のチケット取りは来日前から彼らのリクエストに応じて手に入れたものである。これも来日前からの要望であったが、泉岳寺に行きたいというレアな希望には驚いた。理由を尋ねると、忠臣蔵の映画で赤穂浪士を見たことがあるとのことだった。鎌倉や日光などよりも泉岳寺へ行きたいとの希望だったので、限られた情報の中で何に触れるかということがとても大事なのだと感じた。京都の要望は満たせなかったが、それなりにたくさんの場所を回れたと思う。

心配していた生魚をはじめとする日本料理にはまったく抵抗がないようで、初日から刺身を中心とした日本料理やお寿司など、本当に何でもよく食べてくれた。ただ、どちらかというと彼らは食への興味は淡泊という印象だった。甘さの感覚が違うようで、ココアにガムシロップを足して丁度いいと言ったのには驚いた。

さて、連日朝から晩まで連れ回したので、半分眠りながら夕飯を食べた日もあったほど彼らはクタクタだった。正直、彼らがどれくらい満足したかはわからないが、お世話になった恩を返したい、地球の裏側から来たのだから絶対に楽しんで帰って欲しいという想いが伝わっていたら嬉しい。

6 前日到着メンバーと成田観光

前田文彦

8月31日夜、エクアドルでのホームステイ先のFernandaからメールが届いた。たぶんキトの空港からではないか？最後に「See you in the airport」とある。3日からの公式日程前なので行く予定にしていなかったが想定内のこと、9月2日空港に迎えに行くことにした。これが今回のエクアドル友好登山隊対応の実質的なスタートとな

った。

9月2日朝、栃木より車を運転して6時前に成田空港着、7時過ぎよりエクアドル側隊員が到着ロビーにバラバラと顔を出してきた。4年ぶりの再開。この日到着したエクアドル側隊員は6名（Dennys Castro、Fernanda Gallardo、Patricio Sotomayor、Javier Morocho、Eduardo Navaez、Luis Castro）。

両替やスマホのSIMカードの購入などを対応。「ところで今日の宿は？」と聞くと全員同じホテルではなく、2つのホテルに分かれている。いずれにせよ6名では車に乗り切れないので、成田に住むワカバ（隊員の本多幸子）に応援を要請。本多博さん（本多隊員夫君）と共に成田空港に来てくれ、8時半に合流した。本多夫妻にはこのときからエクアドル隊員が帰国するまで、いろいろと面倒をおかけした。ごめんなさい。

2台の車に分乗して東武ホテルへ。お茶を飲みながら今日これからの行動打ち合わせ。そして次のアートホテルへ。前田と本多はここでいったん別れ、JAC ルームでの翌日からの準備会に参加。



成田山新勝寺にて

6名の観光は本多博さんをお願いした。

以下、観光の記録。

10時～12時 成田山新勝寺（写真）

13時 成田駅近辺のラーメン屋で昼食、箸の持ち方練習し、ビール飲んで楽しげ！

長旅でお疲れと思っていたが元気で、まだ観光するという。

14時～15時 千葉県立房総のむら、昔の日本建築に興味津々。

15時～17時 佐原 香取神宮

準備会を終えた前田、本多と藤田隊員は、成田へ。空港で翌日ネパールに向かう猪熊隊員と一緒に食事との希望があり合流。再び本多・前田の車にエクアドル側6名、日本側5名が分乗し成田市内のレストラン（とんでん）へ。夕食は楽しい懇談となった。解散。

宿泊の各ホテル、成田駅へそれぞれ向かい、前田は栃木へ。長く忙しい1日、でも充実した1日でした。

7 成田空港での顛末

本多幸子

【出迎え編】

9月3日朝、エクアドル隊員を出迎えるために夫と成田空港に向かう。7時に集合場所に着いたときにはすでに渡邊 PL、高野事務局長、志賀 Dr.、三浦隊員が待っていた。志賀 Dr.とは4年ぶりの再会、いよいよ公式日程となる。

昨日到着したエクアドル隊員6名に7時集合を



2019年のユニフォームでお出迎え（成田空港）

伝えてあるので、そのうち来るだろうと思っていた。昨日羽田空港に到着したビニシオも合流。7時過ぎ、今日到着の隊員3名が到着口から出てくる。アートホテルに泊まっていた4名も7時半頃に合流。あとは東武ホテルに泊まっていたカストロ兄弟2名を待つのみとなった。8時過ぎになり、集合場所を間違えたか心配になる。会長のイレーネが電話をするが、つながらない。昨日この場所に到着しているのに間違えるかな……？ 昨晚成田泊だったので、観光案内後にホテルへ送り届けた夫が東武ホテルに電話をする。6時30分にはチェックアウトしているとの情報。とっくに着いているはずだ。どこにいるのだろうか？ さらにホテルに連絡して何時のバスに乗ったかを聞く。監視カメラ映像で調べてくれることになり、連絡を待つ。6時30分頃の空港行きに乗車した模様、そのバスが第一ターミナルだけにしか行かないことを突き止める。このターミナル内にはいるはずだ！ イレーネ会長は2度目の空港内呼び出しをかける。夫と到着ロビー内を探し歩き回っていると、渡邊PLから2人が来たとの連絡が入る。到着ロビーの1階ではなく、バスを降りてから地下まで下りてしまい待っていたようだ。空港内放送に気がついて来たとのこと。

集合写真撮影をしてバスに乗り込む。バスの出発は予定より1時間ほど遅くなったが、予定の都内観光は時間調整ができるのでオリンピックセンター到着時間に問題はなさそうだ。何はともあれ

無事に集合できて良かった。

【見送り編】

9月14日、前日の送別会でフェルナンダから成田空港の近くに住んでいるのか聞かれた。オーストラリア旅行にエドアルドと2週間ぐらい行く予定で、2人の荷物を預かってほしい話だったので承諾した。

見送りに11時頃成田空港に行くと、ほどなく本隊バスが到着。何人かは今日のフライトではないと聞いていたが詳細は知らなかった。イレーネ、アンドレア、パウロの3人が京都観光に行くのに荷物預け場所がなくて困っている様子だった。家で預かることにするが、大型荷物なので夫に3人の荷物だけ乗せて1回家に帰ってもらう。エクアドル隊を見送り解散となる。オーストラリア行きのフライトが夕方まで時間があるので、航空博物館見学後、自宅に招き時間調整をしてから空港に戻り見送りをした。京都観光の3人は17日に成田空港に戻り、オーストラリア観光の2人は10月2日に戻り、無事に荷物を引き渡すことができた。

成田在住なので出迎え、見送りは必ず行く決めていたが、こんなことになるとは思っていなかった。それぞれの都合でバラバラ入国、出国になったのが原因だろう。夫をかなり巻き込んだが、エクアドル隊員との交流を楽しんでいたとのことだった。



お別れの集合写真（成田空港）（左）、模擬日本刀の税関チェック風景（右）

8 エクアドル友好登山隊・歓送迎会

賀集信

【歓迎会】

9月3日18時よりオリンピック記念センターにてエクアドル隊13名の歓迎レセプションが開かれた。

まず日本側主催者代表として橋本しをり会長が、日本・エクアドル外交関係樹立105周年記念と日本山岳会120周年記念国際交流事業としての経緯を述べられた。続いて渡邊プロジェクトリーダーから、2019年の日本隊のエクアドル訪問から、コロナ禍による3年間の延期を経て、今年ようやくエクアドル隊の日本受け入れが叶った苦労話が聞けた。残念なことにその間の諸般の事情で、フラード前会長をはじめ5名のホストファミリーの方



モンターニョ在日エクアドル大使とエクアドルメンバー

が来日できなくなった。

エクアドル山岳連盟（ピチンチャ山岳会）新会長のイレーネ・ポンセ女史が、歓迎に対する謝辞を述べられ、続いて壇上に立たれたセサル・モンターニョ在日エクアドル大使は、対日バナナ貿易の話や、コトパクシ山との相似性から来る富士山への親近感について述べられた。

神崎忠男会員の乾杯の音頭で開宴となり、見覚えのあるエクアドル隊員に今回来られなかったホストファミリーの様子を聞くことができた。最初、寿司などの日本食には慣れない様子だったが、エクアドルメンバーも果敢に挑戦を試みていた。2019年のエクアドル訪問時の映像などで盛り上がったのち、最後に重廣恒夫創立120周年記念事業委員長が、閉会の辞を述べられて楽しい歓迎会はお開きとなった。

【送別会】

9月13日の夜の送別会は、元在エクアドル（現ネパール）日本大使館医務官の志賀尚子先生の司会で始まった。重廣記念事業委員長の開会の辞では、2025年の日本山岳会創立120周年の折に、是非雪をまとった富士山を見に来て下さいという粋なお誘いがあった。渡邊プロジェクトリーダーからは、今回の富士山、槍ヶ岳、立山登山の報告



送別レセプションにて

と、各支部との交流についての話があった。

イレーネ・ポンセ会長からは感謝の言葉があり、続いて来賓として来られたマリア・エレナ・モレイラ公使は、両国の長きにわたる友好関係などについて述べられた。

エクアドル隊員もしっかり覚えてくれたであろう「乾杯」の唱和で宴は始まり、一連の登山活動の映像を見ながら、交流登山の成功と無事を祝った。歓迎会のときとは違って皆日本食にも随分慣れたようだし、また観光地巡りや土産物選びなどの楽しい話も聞こえてきた。

最後に神長幹雄記念事業委員の閉会の挨拶があって、名残惜しくも閉会となった。

VI 交流事業を終えて

志賀尚子

2015年に外務省職員として在エクアドル日本大使館に赴任し、2018年に日本とエクアドルが外交関係樹立100周年を迎えることを知りました。首都キトの近郊には、世界最高の活火山であるコトパクシ山があります。ほぼ赤道直下でありながら通年山頂を雪に覆われたコニーデ式火山の優美なその姿は富士山によく似ています。日々コトパクシを眺めて暮らすうち、富士山とコトパクシが日本とエクアドルの友好の象徴になるのではないか、100周年記念事業の一環として相互に友好合同登山を実施できないか、という考えが浮かんできました。

わたしが日本山岳会に入会したきっかけは、1995年日本山岳会90周年記念事業のマカルー東稜登山隊に医療隊員として参加したことでした。海外勤務となる際に退会してしまいましたが、同遠征隊で副隊長だった渡邊雄二氏（プロジェクトリーダー）が個人的にチンボラソ登山のため高野氏（事務局長）らご友人とエクアドル訪問された際、上記のアイデアについて相談したところ、日本山岳会120周年記念事業として検討してもらうよう関係方面に諮ってみる、とのお言葉をいただき、その後着々と実現に向けて動いていただいたのでした。

2019年、エクアドル側での合同登山は計画通り順調に行われたものの、2020年に開催されるはずだった日本側での合同登山は、コロナ禍のため3年も延期となってしまいました。エクアドル側参加者の中には、購入済みだった日本までの航空券を買い直すことになり、大金の出費を余儀なくされた人もいて、特にエクアドル側で中心となって事業を進めてこられた、前ピチンチャ山岳会会長のフラード氏夫妻が来日を断念されたのは大変残念なことでした。エクアドルでのコロナ流行、感染者数や死者数は相当なものでしたが、本プロジ

エクトの関係者がみな無事であったのは、不幸中の幸いでした。

エクアドル側参加者の中には居合道や空手を長年やっていて、元々日本の武道、文化に多大な関心、憧れを寄せていた参加者も少なくありませんでしたが、全員が今回の来日登山をきっかけに、日本の山に関心を持つのはもとより、日本語を習ったり、箸の使い方を習得したりしてこられました。日本側参加者も、エクアドルに渡航した中心メンバーのみならず、山梨、富山、信濃支部から懇親会や合同登山にご参加くださった会員の方々も、スペイン語を習ったり、日頃あまり日本で報道されないエクアドルのニュースに関心を持って下さったり、二国間友好という点で本事業は大いに貢献したのではないかと思います。日本側での歓迎会開催時には在日エクアドル大使の御臨席もいただきましたが、コロナ流行収束後、エクアドルからの友好使節の来訪は初とのことでした。エクアドルは南米の中でも日本からの移民が最も少なく、ガラパゴスがエクアドルにあることすら日本国内であまり知られていない程ですが、本事業を通じて多くの方にエクアドルに関心を持っていただき、またでき



通訳の友人馬場氏と

ば、エクアドルの山々を訪れる登山愛好家や日本の山々を訪れるエクアドルの方が今後も増えていくことを願っています。

個人的には、30年前の90周年記念マカルー登山隊で一緒した重廣恒夫氏、渡邊雄二氏と、今回再び120周年記念事業で一緒することができたのは大変貴重な機会でした。特にプロジェクトリーダーの渡邊氏には、コロナ流行を乗り越えて足掛け5~6年にわたり、言葉で言い尽くせないほどお世話になりました。どうもありがとうございました。



歓迎レセプションにて

Ⅶ 日本を訪問して

1 日本の皆様へ

イレーネ・ポンセ・サラス

(ピチンチャ山岳・クライミング協会会長)

2019年9月1日から12日にかけて、エクアドルと日本の外交関係樹立100周年を記念して、日本山岳会(JAC)の登山家14名がエクアドルを訪問し、ルク・ピチンチャ、ルミニャウイ、コトパクシ、チンボラソ山に登頂しました。

そしてこの度、2020年からパンデミックの影響で延期していた活動が再開されて、13名のエクアドル人登山家が日本での友好登山活動に参加しました。

9月3日、渡邊氏はじめ日本メンバーの出迎えを受け、成田空港から日本での友好登山ツアーが始まりました。山梨、信濃、富山各支部を訪ね、富士山、槍ヶ岳、立山の山々に登頂することができました。

エクアドルと日本の交流の歴史における記念すべき合同友好登山は、エクアドルと日本の友情に満ちた旅でした。エクアドル隊参加者を代表して、この素晴らしい交流でお会いしたJACとその支部、そのリーダー、そしてすべてのパートナーのおもてなしに心からの感謝を申し上げます。

この数週間を一緒に過ごすうちに、私たちは地理的、文化的な境界を越えて理解し合い、多くのことを学びました。そして、何よりも友情を育む熱意を共有しました。私たちは共に笑い、岩の上で共に困難に立ち向かい、物語や伝統を分かち合いました。私たちはそれらのことを決して忘れることはありませんし、その経験はこれからも私たちの人生を豊かにしてくれることでしょう。

この交流を通じて、私たちは両国間の絆を深めてきました。私たちの背景は多様であっても、敬意、謙虚さ、連帯という基本的な価値観を共有していることを学びました。これらの価値観が、私たちの友情と協力の基盤となっています。

私は、この交流を可能にくださった主催者、ホストファミリー、ガイド、指導者などすべての皆様に感謝したいと思います。皆様の献身と奉仕が、この素晴らしい旅の原動力でした。

私たちはかけがえのない思い出と永遠の友情を胸に抱いて帰国します。しかし、これで終わりではなく、私たちは、共に成し遂げたことをさらに発展させ続ける責任を負っています。これからもこの絆を強め、互いの文化や知識を分かち合い、より団結し調和のとれた世界のために共に努力しようではありませんか。

私たちの交流は、異なる文化を持つ人々が尊敬と協力の精神をもって集まれば、驚くべき成果を成し遂げることができることを示しました。私たちは、多様性がいかに私たちの生活を豊かにし、社会を強化するかを示す模範であり続けましょう。

エクアドル参加者全員を代表して、今一度、この忘れられない旅に感謝を申し上げます。私たちは、エクアドルと日本の協力関係を継続させ、チャンスに満ちた未来へと前進していくために、この思いを胸に抱き続けていきます。

ありがとうございます！グラスアス！



橋本会長とイレーネ会長

2 日出ずる国

ファブリシオ・エステベス

私の父は、豊かな歴史と文化を持つ極東の遠い国の物語を持っていた。子供の頃、私は「侍の物語」、その大胆さ、勇敢さ、尊敬と忠誠の物語を読むのが好きだった。10代の頃、その文化に近づくために、私は武道、空手・合気道・居合道の稽古を始めた。先生たちは、その国の文化についてさらに詳しく教えてくれた。

こうした経験から、私は「いつの日か」日本を訪れたいと思うようになった。28歳のとき、別の登山交流でドイツを訪れ、日本の習慣のひとつである「室内では靴を履かない」ということを学んだ。ドイツ人も日本から学んだと言っていた。

ホセ・フラドとともにアンディニスモ・デ・ピチンチャ協会の役員を務めていたとき、志賀尚子さんから交流の申し出があったことを知らされた。「日本に行きたいという願いが叶うなんて、なんて幸運なんだろう！」と思った。これまでは、経済的な問題で実現が難しい夢でしかなかった。

今、私は日出ずる国に行けたことをとても幸運に思っています。特にAIKIDOやIAIDOの練習生など、多くの知り合いが日本を訪れることを夢見ています。年長者に対する敬意、指導者に対する敬意、そしてすべての人に対する敬意が、武術の師匠から教わった理想であるだけでなく、1億を超える人々が暮らすこの国で当たり前のこととして実践されていることを目の当たりにして、私は嬉しく思う。

東京では泉岳寺を訪れた。ここは私が最も感銘を受けた場所であり、名誉と忠誠のために命を捧げた47人に、その墓前で敬意を表すことができたことに深い満足感を覚える。富士山頂もまた、私が訪れた最も重要な場所のひとつである。日本人がこの山に対して抱いている崇敬の念

のおかげで、私は宗教的な信仰の一端に触れることができ、それが西洋文化が到来する以前のわが祖国独自の信仰と非常に類似していることを知ることができた。

今、私には偉大で誠実な日本の友人たちがいて、彼らがいつかまた私たちを訪ねてくれることを、そして、私も家族と一緒に日本へ行けることを願っている。



赤穂浪士の泉岳寺を訪ねる（上）、日本で購入した日本刀（模擬刀）を自宅に飾る（下）



念願の富士山山頂（剣ヶ峰）にて

3 日本でのクライミング

マリセラ・アリアス

「到達するのが最も難しいと思っていた場所が、実は最も近い場所でした」

この冒険は 2019 年、ピチンチャ登山協会からわたしたちのエル・サダイ・クラブへの提案を受けて始まりました。最初、私たち全員とても興奮していましたが、条件はかなり厳しかったです。でも、とにかく私たちは期待をこめて申し込みました。

日本から友人たちがやってきて、私たちの家で過ごし、山に登り、待っているよと約束して日本に帰っていきました。パンデミックが起り、それに伴って多くの制約が生まれました。そして 2023 年の夏、私たちはようやく日本へ行くことができました。日本に到着したときの興奮は信じられないほどで、本やドキュメンタリーで語られているようにすべてが素晴らしかったです。私の思い出の中で最も貴重なことは、私たちの友人であるミドリとヤスシが空港で私たちを待っていてくれて、彼らの国を少し案内してくれたことです。

友好合同登山開始後、私たちはエクアドルの他

のクラブの仲間たちや、ほとんどの旅に同行してくれた JAC の仲間たちと数週間を過ごしました。興味深かったのは、山に行くときまずその地域の JAC メンバーと交流し、彼らからいろいろ学んだことでした。私たちは基本的な日本語日常会話を練習し、文化や新しい食べ物について学び、寿司やブドウのアイスクリームを楽しみました。

各山小屋に到着すると、日本の山々がエクアドルと同じように大切にされ、人々が知恵を得るために挑戦する神聖な空間であることに気づきました。富士山、槍ヶ岳、立山への登山は、肉体的にも精神的にもタフでしたが、一步一步が素晴らしかったです。歩くたびに、通過するすべての岩、植物、または人に日本文化が息づいているのを感じました。

山旅にはいつも同行している、私の忠実な仲間である 2 人のガトリーヌは、海外で私を待っていた娘のスキのスピリチュアルな存在とともに冒険を楽しんでいました。

この旅から得たものは、日本で JAC の素晴らしい人たちとたくさんの経験をしたことです。その楽しい経験は、私の心のメモリーに保存されて



富士山世界遺産センターにて(上)、富士山頂にて(右上)、2人のガトリーヌも無事に登頂！(右下)

います。いつか彼らがエクアドルを再訪すると決めたら、私たちのクラブが登山やホームステイの支援をしましょう。

愛をこめて、マリ。

4 日本での経験

デニス・カストロ

この国を知ることは、私がこれまで経験した中で最も素晴らしい体験のひとつでした。日本の文化は、その表現のひとつひとつにおいて、まず年長者に、さらにその他の社会に対する敬意が表現されています。都市では、すべてがシンクロして機能し、人々が日々の活動を正確に実行していることに感銘を受けました。

もうひとつ強調すべき重要な点は、日本アルプスの印象的な雄大さです。その山々には、肉体的



成田山平和大塔を背に(上)、不動明王を参拝する(下)

なものや精神的なものを結びつけるスピリチュアルな意味があり、それによって自然と人間の全体的な理解を与えてくれます。

今回の経験は、私の人生をより豊かなものにし、日常生活に生かす新たな視点を与えてくれました。私たちは、調和と日常生活を取り巻く環境との結びつきを持たなければなりません。

この場をお借りして、ご親切にも私を自宅にいるかのように心地よくもてなして下さった JAC スタッフの皆様にご感謝の意を表したいと思います。

5 夢の国、日本

ルイス・カストロ

日本に来た初日から、私は現代と古代からの歴史のバランスに基づいた社会の日常生活を体験したばかりでなく、この国のテクノロジーの進歩に驚きました。

印象的だったのは、若者たちが年長者に敬意を払っていることと、幼い子どもたちが自由に安心して動き回れる安全性でした。

日本は、文明全体の模範となるような自国の向上を目的として、先進的で秩序ある社会が何を達成できるかということ、自国民や異邦人に体験する機会を提供する国です。

自然環境に関して言えば、日本アルプスの山々



松本城の美しさに感動！



神聖な頂上へ向かう

は、そこに住む人々にとって精神的な意味を持っており、だからこそ、訪れる者はみな敬意を払い、生態系を守らなければなりません。私は、自分の経験を通じて、知人たちに、私たちみなが調和と平和のうちに一緒に暮らせるような生き方をすべきだと助言したいです。

この場をお借りして、私たちの訪問を温かく歓迎し、日本の文化、伝統、美しい社会について学ぶ機会を下さった JAC 関係者のみなさまにお礼を申し上げます。

6 「お腹」も心も満たすおもてなし

ファン・ハビエル・モロチョ・オニヤ

日本とエクアドルの交流は、文化、食事、人々、風景など、実り多く素晴らしい経験でした。そして、私の人生において忘れ難いものとなりました。

【富士山】

それぞれの国には象徴的な山があります。エクアドルはコトパクシ火山であり、日本は富士山です。夜明けを迎えた5合目から見上げた富士山は、神聖な山に相応しい姿で私たちを歓迎してくれました。頂上へ続く斜面につけられた道、その道の砂のような火山礫までも私たちを歓迎してくれているようでした。康司、みどり、修をはじめ、素晴らしい仲間と共に富士山に登頂し、お鉢まわりをすることができたことは本当に素晴らしいスピリチュアルな経験でした。

【槍ヶ岳】

槍ヶ岳の登りでは、上高地からの距離の長さ、登るにつれて増していく傾斜、そして大きく変化する地形にとっても驚かされました。緑豊かな森の中を進み、登るにつれて変化する地形・植生と森林限界の上に広がる景観、そして最後はロッククライミング！ 私は、エクアドルで傾斜のある山での登山やさまざまな地形のトレイルランニングをしています。槍ヶ岳登山での経験と学んだことに心が満たされました。お付き合いいただいた高野さん、圭吾さん、ありがとうございました。

【立山】

立山火山の頂上では、日本の文化、山と神道・仏教との精神的関係性にとっても感銘を受けました。私たちが登った立山の峰々は、山と人生を重ね合わせて考える私の心に深く刻まれました。「このまま、ずっと登り続けたい！」と思いましたが、皆



富士山剣ヶ峰にて（左）、槍ヶ岳をバックに。坊主岩小屋にて（右）



雄山にて

の合言葉となった「オンセン・ビール！」が待っているみくりが池温泉へ向かい、温泉に入り、ビールで乾杯しました。同行してくださった圭吾さん、高野さんに心より感謝いたします。

常に私たちを気遣い、「お腹」も心も満たすおもてなしをありがとうございました。日本山岳会、この忘れがたい経験を分かち合うことができた会員の皆様と行く先々で歓迎してくださった皆様に心から感謝申し上げます。

7 私の人生経験

パウロ・オバンド

日本に来て感じたことは、日本人が自然をととても大切にしていることです。そして、秩序と他者への敬意は、日常の活動でも登山でも並外れてい



浅間大社奥宮鳥居の下で

ます。人々はとてもフレンドリーで親切です。交通、建物、庭園、公園、そしてエキゾチックな食べ物、日本の本質を表しています。山々は印象的で風景を楽しみました。動植物、トイレ、山小屋のサービス、アプローチの長さ、すべてが印象的でした。

日本人のホスピタリティと良い雰囲気は別次元です。年齢に縛られず、アクティブに活動し、情熱を注いでいること、つまり山登りをすることに限界がないのを目の当たりにしたのは、私には驚きでした。

富士山への登りでは、長い道のりと下り坂を余すところなく味わいました。たくさんの登山者がいて、たくさんの山小屋がありました。山頂のクレーターは美しく、そこから海を見るのは本当に特別な経験でした。

槍ヶ岳は、美しい風景と槍ヶ岳山荘のとてもおいしい食事、たくさんのおもてなしに感銘を受けました。そして何よりも上高地からのアプローチの長さも印象深い体験でした。

立山登山。宗教的なテーマが印象的で、いくつかのピークのツアーでは、火山性の噴煙を見てその匂いを嗅ぐことができました。

今回私たちが幸運にも滞在できた場所はすべて壮大で素晴らしかったです。私はすべてに心から感謝し、いつも日本の友人のことを心に抱いています。

8 日本の登山アドベンチャー

アンドレア・トルヒーヨ・ロンキージョ

日本の皆さん、この素晴らしい経験をありがとうございました。

9月4日 富士山世界遺産センター。

9月5日 富士山(3776m)、神聖な山。友情と私たちの思いを胸に頂上に向かう。砂の無限に続く下り坂！（過小評価の余地はありません！）

9月7日 槍ヶ岳(3180m)。20kmのトレイル、川、沢、山小屋、日本アルプスからの水、赤い顔

をしたマカクザルとその子ザル。

9月9日 立山カルデラ砂防ミュージアム。

9月10日 立山 (3003 m)。神聖な山、頂上の聖域、3つのピーク、永遠の若さ、ライチョウ、二酸化硫黄、温泉。

スポーツや文化交流に参加することは、常に素晴らしくユニークな経験になるでしょう。

日本の皆さん、Dômo Arigatô Gozaimasu



ホッと一息 (富士登山)

VIII 事務局日誌

高野正道

6月

渡邊 L とカトマンズの志賀 Dr. の間でメールのやり取りが頻繁になる。航空券が無効になってしまい、6名が来日断念となる。コロナ過による3年間の延期は想定外であったが、パンデミックのような先の見えない状況下では、航空券はいったんキャンセルして現金化すべきだった。もちろんエクアドルマターであるが。

6月14日

受け入れ準備が整いつつあったこの日、来日を8月29日から9月3日へ変更する要請が来る。航空券の価格が大分安くなるようだ。わかっていたことだが、南米の方々はスロースターター。航空券の有効期限や変動価格を含め密な情報整理と超強力な念押しが必要であったということか。しかし、やはりこれもエクアドルマターである。9月3日の来日ですべての予定を組み直し、変更手続きに追われる。

6月17日

準備会。3年の延期を経てスタッフが顔を合わせる。日程変更の状況を説明し、エクアドル一行の受け入れ準備を確認する。(JAC ルーム、渡邊 L ほか)

7月27日

オリセンで打合せ。レセプション会場設営、食事内容など打合せと発注をする。(渡邊 L、高野)

8月17日

富士山下見登山後、富士吉田市青少年センター赤い屋根を訪問。懸案の交流会会場(飲食店)は現地に足を運び決めることができ安堵する。(渡邊 L、高野)

8月19日

準備会。各メンバーの参加日程の調整など準備作業を進める。(JAC、渡邊 L ほか)

8月22日

槍ヶ岳下見登山、槍ヶ岳山荘挨拶。山もインバウンド、外国人で活況である。(渡邊 L、高野)

8月23日

下山後、西糸屋山荘、上高地公園活動 ST、上高地インフォメーションセンターを訪問する。

9月2日

最終準備会。資料準備ほか。(JAC、渡邊 L ほか)。志賀 Dr.が合流、渡邊、高野と成田へ移動。

9月3日

初日、2時間遅れの全員集合と波乱のスタートとなる。前日到着した同じ場所なのに！ 2時間何をしていたのだろうか？

2人の宿泊ホテルの防犯カメラの映像から成田空港第一ターミナル行のバスに乗ったことを特定するという、刑事ドラマのような展開となった。エクアドル側がもう先に行こうと言い出したが、渡邊 L がもう一度隅から隅まで探そうと押しとどめ、ついに彼らが発見される。集合場所に定刻に集まるという常識は粉々に砕かれたが、彼らが目の前に現れた喜びとこれでスタートできるという安堵感はとても大きかった。

今回、渡邊リーダーの発案で事務局高野が車でバスに帯同していくことになった。食料調達などの買い物や先行して各宿泊手続き、支払いを行う。早速、浅草観光の間に、浅草松屋で崎陽軒シューマイ弁当を購入し、バスを待つ本隊に届け、オリセンへ向かう。少々細かい諸手続きと支払いを済ませ、本隊と合流する。本隊の行動はおおむね滞ることなく、渡邊 L の狙いどおりとなる。

その後は、オリエンテーション、宿泊棟チェックイン後、歓迎レセプションが橋本しをり会長の挨拶をいただき、柏澄子さんの司会で和やかに進行する。

9月4日

富士吉田への移動日。今日は行動食の買い出し。富士吉田のスーパーでは、水や食品がとても安く、すべてをここで調達する。500ml 飲料 168 本はじめ、多くの食料購入に時間がかかり、昼食会場へ

遅れて到着。エクアドルメンバーは全員、最後まで箸で頑張っていて食べていて感心する。

富士山世界遺産センターで本隊と別れ、赤い屋根へ向かい入所手続きを済ませ、本隊を迎える。その後、朝昼食用弁当類の明朝 4 時受け取りを念押しするためコンビニへ代金支払いに行く。山梨支部交流会には遅れての参加となった。小上がりにぎゅうぎゅう詰めになって盛り上がる姿に国境なし！

9月5日

富士登山。今日は本隊と同一行動。朝 4 時過ぎ、コンビニで注文の品を受け取り、5 合目に向かう。横一列になって富士山頂に祈りを捧げるエクアドルメンバー。イレーネ曰く、「すべての山々に神はいます。」

9月6日

上高地へ移動。松本で東英樹支部長、本隊と昼食後、沢渡へ。ここで本隊のバスにピックアップしてもらい上高地へ。信濃支部交流会は西糸屋山荘のおもてなしと東支部長のリードで楽しい会となった。

9月7日

槍ヶ岳登山。先行組と同一行動だったが、水沢から先行し、槍ヶ岳山荘で宿泊手続きを済ませて到着を待つ。彼らは、低い標高の暑さにまいったようである。部屋に入りアスタマニャーナモードの先行組男性メンバーを一番疲れている紅一点フェルナンダが「頂上に行こう」と鼓舞していたと聞く。まるで昔の青春ドラマみたいだ。お陰で登頂することができて感謝である。明朝の悪天候は確実であるが、後着組は明日の登頂を選択する。夕食前、「キッチン槍」に集まったメンバーはアルコールも入り、賑やかである。考えてみれば、3000m は彼らの普段の生活圈であり絶好調なわけだ。

9月8日

上高地へ下山。朝、風雨のため、登頂は諦める。途中から雨は上がり、長閑な道中となる。山研で

は、古野淳前会長が買い出しをし、日本側スタッフと信濃支部松本潔氏が用意した食事で「あたたかな」素敵な懇親会となる。後片付けではエクアドルメンバーも協力して、いい感じである。

9月9日

始発のバスで沢渡に置いた車に戻り、槍ヶ岳登山のサポートを終えた片岡泰彦氏と別れる。途中、買い物、現金引出しをして富山へ移動。飯田肇副会長案内のカルデラ博物館見学中、駅前の商店への支払いを済ませ、登山研修所へ先行して受け入れ準備をする。米山隆所長が用意した日本海産の刺身はじめ豊かな食事は好評で、登山研修所での富山支部との交流会は友好の輪を大いに広げたようだ。

9月10日

立山登山。鍛冶支部長・支部会員4名とともに班を分けての行動になる。遥かに富士山、槍ヶ岳を望む立山山頂で、日本エクアドル合同の万歳三唱は爽快であった。そして、日本での登山の最後は温泉というわけで、みくりが池温泉に入り、富士山、槍ヶ岳、立山と続いた登山はフィナーレとなる。

9月11日

東京へ移動。立山駅前で本隊を見送り、直接オリセンへ。3日同様、本隊の受け入れ準備をする。

車での帯同は本日まで。走行距離は1070kmであった。皆夜遅くまで買い物や観光に出かけていた。

9月12日

自由行動日。それぞれ日本側スタッフの案内で夜遅くまで東京の1日を楽しむ。

9月13日

自由行動日。早朝散歩、数名で代々木公園を抜けて明治神宮を参拝する。今日も、皆それぞれの希望で日本側スタッフと行動する。送別レセプションは、志賀 Dr.と友人の馬場太一郎氏（歓迎レセプションに続き通訳を快諾していただく）のコンビによりアットホームな雰囲気で行進する。

9月14日

オリセンから成田空港。オリセンで日本側スタッフ数名に見送られ、成田空港へ向かう。来日時と同様に帰りも、帰国の途につく人、京都やオーストラリア、ニューヨークに行く人、いろいろである。善意の輪。旅行を続ける人たちの大きな荷物預け先を心優しい志賀 Dr.が空港中懸命に探している。「自宅に預かりましょう」と助け船を出した本多博・幸子ご夫妻は3日に続き大車輪の活躍である。

心温かな対応で両国の友好登山に花を添えていただき、無事全行程を終えることができた。

■行動概要・日本側メンバー参加一覧

行動概要・日本側メンバー参加一覧			日 本	エ ク ア ド ル	合 計	日本側スタッフ												協力スタッフ(登山等)					各 支 部 合 計			
						渡 邊 雄 二 P L	志 賀 高 子 元 在 大 使 館	高 野 正 道	吉 井 修	三 浦 拓 朗	荒 木 輝 夫	田 島 圭 吾	中 谷 康 司	松 尾 み ど り	前 田 文 彦	藤 田 礼 子	本 多 幸 子	重 廣 恒 夫	賀 集 信	片 岡 泰 彦	古 野 淳	飯 田 肇 (富 山)		松 本 睦 男 (富 山)	山 田 信 明 (富 山)	鍛 冶 哲 郎 (富 山)
9/3 (日)	出迎	成田空港	18	13	5	○	○	○	○																	
	バス移動	成田⇒浅草⇒皇居他⇒東京	16	13	3	○	○	※1	○																	
	オリエンテーション	国立オリンピック記念	24	13	11	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	歓迎レセプション (オリセン)	青少年総合センター (オリセン)	26	13	13	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
9/4 (月)	バス移動	東京⇒山中湖⇒富士世界遺産 センター⇒富士吉田	17	13	4	○	○	※1	○																	
	山梨支部交流会 宿泊	みずほ(食堂) 富士吉田市青少年センター赤い屋根	24	13	11	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	3
9/5 (火)	富士登山	吉田口五合目から往復	22	13	9	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	宿泊	富士吉田市青少年センター赤い屋根	19	13	6	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
9/6 (水)	バス移動	富士吉田⇒松本⇒上高地	17	13	4	○	○	※1	○																	
	信濃支部交流会 宿泊	西糸屋山荘 西糸屋山荘	25	13	12	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	※2	
9/7 (木)	槍ヶ岳登山	上高地⇒槍ヶ岳⇒槍ヶ岳山荘	19	10	9	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	上高地散策		6	3	3																				○	
	宿泊	槍ヶ岳山荘	19	10	9	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	宿泊	西糸屋山荘	3	3	0																					
9/8 (金)	槍ヶ岳登山	JAC山岳研究所	5	0	5																				○	
	上高地散策	槍ヶ岳山荘⇒上高地	19	10	9	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	山研懇親会	JAC山岳研究所	26	13	13	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	宿泊	上高地公園活動ステーション	6	0	6																				○	
9/9 (土)	バス移動	上高地⇒高山⇒富山	19	13	6	○	○	※1	○	○	○	○														
	立山カルデラ砂防博物館(案内・飯田肇氏) 富山支部交流会 宿泊	国立登山研修所	22	13	9	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
9/10 (日)	立山登山	室堂起点	26	13	13	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	宿泊	国立登山研修所	19	13	6	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
9/11 (月)	バス移動	富山⇒ららん藤岡⇒東京	18	13	5	○	○	※1	○	※3	※3															
	都内観光(夜) 宿泊	オリセン	16	13	3	○	○																			
9/12 (火)	都内観光		21	13	8	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	宿泊	オリセン	17	13	4	○	○	○	○																	
9/13 (水)	都内観光		18	13	5	○	○	○	○	○																
	送別レセプション 宿泊	オリセン	26	13	13	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
9/14 (木)	オリセン見送り	オリセン	5		5																					
	バス移動	東京⇒成田	18	13	5	○	○	○	○																	
	成田見送り	成田空港	20	13	7	○	○	○	○																	
敬称略	※1 帯同車で同行	※2 松本案内	※3 藤岡PA下車																							
※	各支部交流会出席者	山梨支部交流会 信濃支部交流会 富山支部交流会	磯野澄也、古屋寿隆、黒沼英美 東英樹、松本潔 中西紀夫、木戸繁良、松本睦男、山田信明、鍛冶哲郎、米山隆(登山研修所長)																							
※協力者	・歓迎・送別レセプション通訳(友情参加) ・成田空港及び成田でのアテンド	馬場太一郎(志賀dr御友人) 本多博																								

■エクアドルメンバーリスト

	2019ホームステイ対象者	エクアドルメンバー				
		略称	姓	名	年齢	性
1	松尾	Maricera Arias	ARIAS QUINATO A	RITA MARICELA	37歳	女
		マリセラ アリアス	アリアス・キアトナ	リタ・マリセラ		
2	荒木	Dennys Castro	CASTRO CORNEJO	DENNYS ALFREDO	63歳	男
		デニーズ カストロ	カストロ・コルネホ	デニーズ・アルフレド		
3	中谷	Fabricio Esteves	ESTEVEZ VILLACIS	LUIS FABRICIO	49歳	男
		ファブリシオ エステベス	エステベス・ヴィラシス	ルイス・ファブリシオ		
4	前田	Fernanda Gallardo	GALLARDO QUINTANA	GABRIELA FERNANDA	38歳	女
		フェルナンダ ガラルド	ガラルド・キンタナ	ガブリエラ・フェルナンダ		
5	田島	Patricio Sotomayor	SOTOMAYOR MOSQUERA	PATRICIO RAMIRO	56歳	男
		パトリシオ ソトマヨール	ソトマヨール・モスケラ	パトリシオ・ラミオ		
6	猪熊	Fabricio Peña	PEÑA CARRASCO	EDWIN FABRICIO	40歳	男
		ファブリシオ ペニャ	ペニャ・カラスコ	エドウィン・ファブリシオ		
7	三浦	Xavier Morocho	MOROCHO OÑA	JUAN XAVIER	43歳	男
		ハビエル モロチョ	モロチョ・オニャ	ファン・ザビエル		
8	渡邊	Eduardo Navaez	NARVAEZ VASCONEZ	EDUARDO GUILLERMO	38歳	男
		エドアルド ナルバエス	ナルバエス・ヴァスコネス	エドアルド・ギレルモ		
9		Luis Castro	CASTRO CORNEJO	LUIS ENRIQUE	63歳	男
		ルイス カストロ	カストロ・コルネホ	ルイス・エンリケ		
10		Andrea Trujillo	TRUJILLO RONQUILLO	ANDREA LILIANA	36歳	女
		アンドレア トルヒーリョ	トルヒーリョ・ロンキーリョ	アンドレア・リリアナ		
11		Vinicio Barba	BARBA MÉNDEZ	CARLOS VINICIO	43歳	男
		ビニシオ バルバ	バルバ・メンデス	カルロス・ビニシオ		
12		Irene Ponce	PONCE SALAS	IRENE MARIA	49歳	女
		イレネ ポンセ	ポンセ・サラス	イレネ・マリア		
13		Paúl Obando	OBANDO CASTILLO	PAÚL ANDRES	33歳	男
		パウル オバンド	オバンド・カスティーリョ	パウル・アンドレス		

■贈答品リスト

日本からエクアドルへ

ユニフォーム、キャップ、古道手ぬぐい、シューズ袋、冊子「写真で振り返る日本人のエベレスト」

エクアドルから日本へ

ストロウハット（記念バッジ付き）

ユニフォーム 男性用（上）・女性用（下）
日本隊員、エクアドル隊員、スタッフ分として30着の提供を受けた。（提供/株式会社ファイントラック）



Ⅸ 会計

2023年登山隊の会計収支を以下にまとめた。

収入			
	項 目	金 額	備 考
隊員負担金	隊員2019年負担金繰入額	2,313,407	
助成金	日本山岳会創立120周年事業助成金	1,500,000	
利息	普通預金利息	16	
会費	レセプション・懇親会会費収入	404,000	
	合計	4,217,423	
支出			
	項 目	金 額	備 考
交通費	貸切中型バス関係費用	958,700	栄和交通
宿泊費	オリセン、赤い屋根、西糸屋山荘、槍ヶ岳山荘、山研、登山研	1,193,180	一部食費込
食費	夕食・懇親会	727,793	
食費	昼・行動食	107,076	
レセプション費	歓迎、送別	272,160	オリセン
会議室料	オリエンテーション	11,480	オリセン
準備活動費	関係先訪問・下見登山（富士山、槍ヶ岳）	106,572	
帯同車経費	燃料・有料道路料金	47,786	
ユニフォームプリント代金	ファイントラック無償提供30着分	99,308	ファイントラック
諸経費	宅急便・無線乾電池他	43,066	
渉外費	贈答品	65,000	予算計上
報告書作成費	繰越	300,000	予算計上
交流活動費	繰越	285,302	予算計上
	合計	4,217,423	
	差引収支	0	

X 編集後記

高野正道

2020年、東京オリンピックが延期となり、高校野球は中止となりました。我々も延期を決めましたが、その後3年も延期となるとは思いもよらないことでした。2023年いよいよ実行のときを迎えましたが、2019年のホストファミリー6名が参加できなくなり、3年という年月の重さを改めて感じることになりました。

渡邊Lが書いているように、準備段階の苦労は大変でした。氏の忍耐強さと献身により実現できました。初日9月3日は集合時間から2時間遅れのスタートとなりましたが、準備万端、天候にも恵まれて全日程を無事完遂することができ、その努力はおおいに報われました。

富士山、槍ヶ岳、立山それぞれが信仰の山々であることにエクアドルメンバーは感銘を受けていました。各登山では、エクアドルメンバーに体力の差があったもののメンバー相互のサポートが噛み合っていたようで良い登山となりました。また、登山を終え、仕事に戻り、深夜また車を運転して次の登山に参加する、という日本側隊員の献身的な頑張りもありました。日本人隊員たちの思いはエクアドルメンバーに伝わり、一体感が一層高まっていきました。

山梨、信濃、富山各支部との交流会は、登山同様重要なイベントでした。各支部三様の楽しい会となりました。回を追うごとに大胆になっていくエクアドルメンバーに、彼らの愉快的な日常を垣間見る思いでした。

日本側隊員が書いているように、エクアドルメンバーは極めて明るく寛容でした。そして、箸を使って日本食を堪能し、相撲やジブリなど日本文化に触れていましたが、エクアドルで日本の武道を習っている人が多いことに驚きました。カストロ兄弟は志賀氏の案内で武道ゆかりの寺院を訪ねていました。2人のファブリシオ（エステベスとペニャ）が模擬日本刀を何振りも購入しており、

税関のチェックで汗をかいていました。改めて彼らの日本への憧憬の念を知ることになりました。

時の経過とともに、エクアドルメンバーは集合時間を守る人が増え、日本に順応してきたようでした。同様に、日本人メンバーはエクアドル人のおおらかさに近づいたようで、お互いいい感じになってきたのはおかしかったです。エクアドルメンバーの寄稿文からは、日本での経験に大いに満足していることがわかり、安堵しました。

志賀氏が書いているように、本事業は彼女の「ひらめき」から生まれ、生みの親として大きく育てていただきました。志賀氏のスペイン語スキルによってエクアドルメンバーとのコミュニケーションが円滑になり、大いに助けられました。そして、彼女のいったんすべてを受け入れることのできる心の大きさ、優しさや献身は、私たちのホスピタリティの良きお手本となりました。

本多幸子氏が「成田空港での顛末」に書いているように本多博氏（幸子氏ご夫君で日本山岳会会員）のご協力も素晴らしいものでした。前日到着したエクアドルメンバーのアテンド、翌3日の空港での搜索、エクアドルメンバーを自宅へ招き、大量の荷物の保管など大いに助けていただきました。まさに成田のホストファミリーでした。親切はそれを見ている人も幸せにします。

振り返ってみると、エクアドルの人々が日本人とバスで移動しながら、富士山、槍ヶ岳、立山を登り、各地支部の交流会での出会いを重ねながら旅をするロードムービーのようでもありました。2016年、エクアドルで始まった渡邊Lと志賀氏の構想から足掛け8年となった本事業もエンドロールとなりました。

今回来日を果たせなかった2019年のホストファミリー6名が、日本の山に登れる日が来ることを心から願っています。そして、2019年と今回の友好登山で生まれた日本山岳会、本事業にご協力いただいた方々とエクアドル岳人たちとの友情がより深まることを願っています。

本登山隊は、日本山岳会創立 120 周年記念事業の助成を受けて実施しました。

公益社団法人 日本山岳会創立 120 周年国際交流事業
日本・エクアドル外交関係樹立 100 周年記念
友好合同登山隊 2019～2023 報告書
～両国の高みを目指して～

主 催 : (公社) 日本山岳会
〒102-0081 東京都千代田区四番町 5 番 4
TEL 03-3261-4433
編集・発行 : 日本・エクアドル友好合同登山隊プロジェクト

